

---

# イナズマイレブンGO もう1人のシード

イナイレの世界に行きたい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イナズマイレブンGO もう1人のシード

### 【Nコード】

N2850V

### 【作者名】

イナイレの世界に行きたい

### 【あらすじ】

フィスフセクター……。それはサッカーの試合の得点、勝敗を支配する組織。

そして、それを見守り、フィスフセクターに逆らうサッカー部を潰す……。シード。

雷門の送り込まれたシードは1人……。しかし、もう1人いた……。。

## もう1人のシード（前書き）

この話は殆どアニメとおりです。

アニメにはない話もありますが。

いくつか、オリジナルキャラを出します。

## もう1人のシード

雷門、入学式。

「今日、雷門に転校してきました里山優理です。」

私、フィスフセクターのから送られてきた・・・。

シード。

女子サッカー部なんか三つも潰したよ。

次は私潰すのではなく、もう1人のシードが潰す。

私は、マネージャーとして裏から潰していくのよ。

先生「じゃあ、霧野と神童の後ろだ。」

2人の後ろの席に座る。

優理「蘭丸くん、拓人くん。私のこと、覚えてる?。」

2人「えっ!?。」

2人は驚き、戸惑いの表情になっている。

優理「優理よ、ほら・・・近くの公園でよく遊んでたじゃない・・・」

神童「ハッ・・・。優理・・・ちゃん・・・。」

霧野「あの時の優理ちゃん!？」

優理「うん、よくサッカーしたよね。周りに友達がいなかったから・・・。」

そう、・・・神童拓人と霧野蘭丸と私は・・・幼馴染だった。

幼馴染といっても・・・お互いの両親も・・・家族も知らない。

言ってみれば、遊び友達って・・・感じ。

仲が良くてあちこち行った・・・。

でも、お父さんの仕事の関係で・・・すぐ、引っ越した・・・。

神童「ここでまた会えるなんて・・・運命を感じる・・・。」

優理「ふふ、それにしても、蘭丸くんは相変わらず女の子って感じ。」

霧野「っ……！それ言っなよ！！」

さて、本題だわ……。

優理「私ね、サッカー部のマネージャーやりたいの。」

2人「えっ……！？」

驚きの表情になっている。

優理「だって、2人とも……サッカー部入ってるでしょ？」

神童「う……うん……そうだけど……。」

霧野「サッカー部は……やめておいた方がいい。」

優理「どうして？」

神童「大変なんだ……部員よりはるかに……。」

えらい、えらい。止めてる……。でもせがんだらどう断るか……。

優理「でもどーしても……！お願いっ……！頑張るからっ……！」

しばらく黙り、2人は見合わせ。

霧野「しよーがないな……。」

ああ、承諾しちゃった……。まあ、この程度なら問題ないでしょう。

すると男子生徒が入ってくる。

男子生徒「たつ……。大変だ！！サッカー部が！！サッカー部が！！」

2人「！！」

ふふ、ついに来たわね……。

シード。

グラウンドには、剣城と松風がいた。

それについて行った優理……。

な……。まあ……。同じシードのもの……。そんなことも……。ある……。わよ……。ね。

そのまま神童率いるファーストチームが

剣城京介率いる黒の騎士団との戦いになった……。

私は、その戦いを見た。

まさか、南沢篤志からの交代が……あんなちっぽけな新生、松風天馬に任せるなんて……。

フィスフセクターをなんだと思ってるのかしら。

それに、まさか拓人くんが……化身を生み出すなんて……ね。

試合後……

優理「雷門中のシードが、まさか京介なんてね。」

剣城「学校で気安く呼ぶな。」



優理「…………。ちゃんと漬してよね、私…………マネージャーなんだから。」

剣城「そんなことを言うために来たのか…………姉さん」。

そうよ…………全ては…………あの日から…………

友を裏切る…………覚悟でね…………。

## 新人生、神崎聖也

神崎「おい、そのマネージャーみたいな奴！」

え？私の・・・こと？

振り返ってみた。

優利「私は、マネージャーじゃないわ。これからなるの。それと、私は、山里優利！」

神崎「俺は、神崎聖也。やっぱ、サッカーはいいよな！・・・雷門は、円堂様の母校！！くうー！！燃えてきた！！！」

はあ、なんか面倒な奴・・・。

優利「サッカー部は、やめておいた方がいいわ。」

神崎「なんで？」

優利「今の惨劇見たでしょ？あなたも、ボロボロにされるわ。」

神崎「構わないさ！！ボロボロになっても、戦うのが男って奴だろ！？俺、入部するぜ！」

優利「あなたに、そんなサッカー技術があると思えないわ。」

すると、神崎はニヤリと笑う。

神崎「ふふふ！見ろや！俺の豪炎寺様を越える・・・」

ゴウエンジ・・・

やめて・・・あの日を思い出す・・・！！

優利「じゃあねー!!」

優利は逃げ出すように去っていった。

神崎「・・・？ってえ！！入学式、忘れてたあああああ！！！！！！」

松風「キミも、サッカー部に？」

神崎「ああ！燃えるよな、サッカー！！」

西園「僕も、サッカー部入るんだ！！」

楽しみだぜ・・・！

神崎達が部室に向かうと、次々にサッカー部をやめるセカンドチーム。

やめることに反抗した、松風と神崎は罵声を浴びる。神崎「く！！なんなんだよ。あの先輩達！！あれでも、雷門サッカー部かよ！？」

なんで・・・こんな・・・。どうしてやめるんだ！

そこに・・・

優利「あ、さっきの神崎と松風。やっぱ、来てたんだ。」

へえ、残ったのはファーストチームだけか・・・。

いい感じに潰れていくわ。

3人「サッカー部に、入部します！！」

チツ、邪魔なことを・・・！

優利「拓人くん……。こんな、新入生……。雷門の名がすたるんじゃないの？」

神童「……。もう、ここには来ないでくれ。」

神崎「なんでだよ！？ たった9人しかいないのに！！！」

神童「お前に何がわかる！？」

神崎「つて奴……。なんなのよ、先輩に対する礼儀がないの……。？」

あんな奴、すぐに潰される……。！！

結局、入部テストで、入部を決めることになった。

放課後

優利「拓人くん、具合……。大丈夫？ 化身を生み出したあと、倒れたから心配したよ？」

神童「ごめん、う……。うう……。。」

泣き出す神童。

ああ、泣いちゃった。

相変わらず、泣き虫なんだから。

優利は、神童の背中をさする。

神童「優利……。」

優利「私が、マネージャーになって拓人くんの力になるね。」

神童「……。」

黙る神童。

優利「あんな新入生なんかサッカー部に入る必要ない……。」

優利「京介!!」

剣城「なんだ、姉さんか。」

優利「ファーストチームの9人しか、残らなかったわ。でも、新入生が入るとかなんとか。」

剣城「松風か・・・そんな奴、簡単に潰せる。俺は、サッカー部に入る!」

優利「まかせたわ。・・・それと私、拓人くと付き合うことにした。」

・・・。

剣城「・・・はあ?」

優利「親近感を深めて裏からつ・ぶ・す・の」

剣城「ふん・・・。」

夜、呼び出す」

優利「ねえ、拓人……。」

神童「何？優利。」

なんで急に、僕を呼び捨てに……。？

優利「私と……。付き合っしてほしいの……。」

神童「……。えっ……。」

動揺する神童。

優利「答えは、すぐに出さなくてもいい。考えて……。」

すると、

神童「わかった、付き合おう。」

え……。？そんな……。こんな……。早く……。？なんか……。恥ずかしいよ……。



付き合いといっても私と拓人の性格上ベタベタするわけでもなく自然に。

それに、私は本気というわけじゃないから、ややぎこちなかった。

## 入部テスト、サッカー界の真実

朝早くから練習する3人。

神崎「俺の必殺技を見せてやろう!!スマッシュファイヤー!!!!」

蹴ったボールが炎をまといぐるぐるとまわる。

西園「すごい!!」

松風「これじゃあ、キーパーもどこをとらえたらいいかわからないね。」

よし、次は・・・

神崎「ボールの奪い合いだ!!」

西園「よおし・・・!!」

しかし簡単に神崎にかわされる。

松風「早い!!」

神崎「俺は幼稚園のころからサッカーやっててさ!!小学生でも優秀な方なんだぜ。自分でいうのもアレだけど。」

松風「負けるもんかあああああ!!!!」

神崎のボールを奪う松風。

！？・・・・なんだ・・・・こいつ・・・・。

サッカーはそこそこののに・・・・なんで・・・・

ボールが奪えた。

神崎「次はパス練・・・・」

チラリと時計が見える。

神崎「うわあっ！！やべえ・・・・遅刻だ！！」

神崎「入部テスト！燃えてきたあああああ！！」

松風「がんばろうね、聖也。」

神崎「おう！気合と根性と情熱でやるぞー！！！！」

西園「天馬、聖也早くしないと遅刻しちゃうよ。」

2人「わわわつと！！」

でも・・・・放課後にや俺の才能が開花してるぜ。

西園「えいつ!!」

神崎「いいパスだぜ!!よし、次は天馬!!」

神崎からのパスを受ける。

天馬「よっし!」

水鳥「やってんじゃん……。」

葵「あつ瀬戸先輩!」

水鳥「水鳥でいいよ。」

葵「水鳥さん……。」

茜「また、神様見れる。」

あ、新人生やってるやってる……。

まあ、入部されるのも……手の内だけだね。

優理「そっいえば、顧問と監督はどこに?」

茜「あんないします。」

音無「アナタが新しいマネージャーね。」

優理「はい、転校してきました、2年の山里優理です。」

久遠「私がここの監督だ。」

優理「よろしくお願いします。」

まあ、この2人をよく知っておけば・・・

裏からでもやりやすい・・・ってことだわ。

そして、入部テストが始まる。

次々にパスを奪われていく松風と西園達に比べ、神崎は快進撃をしていく。

神崎「よつと！つと！」

車田「結構やるな。」

フフフン！俺はこんなもんじゃないぜ！！

パスされ神童からボールを奪おうとするが・・・

神童「っ！！！」

かわされ転ぶ神崎。

神崎「うわっ！！！」

早い・・・へっ・・・さすがキャプテン・・・ってところか・・・。

松風「うおおおっ！！サッカーやるんだあ！！！」

神童「無駄だ！！！」

葵「天馬！！！」

水鳥「根性見せろ！天馬！！」

茜「神様」

あ、あの・・・隣の人を・・・どうにか・・・して。

優理「がんばって、拓人！」

霧野「・・・・・・・・神童・・・・・・・・。」

神崎「うおおおおおつ！！サッカー・・・やるんだあああああああ！！！！情熱うううつ！！！！根性！！！！」

神童「・・・・・・・・。」

しかしかわされる。

松風「絶対・・・入部するんだ！」

というか、いまどき根性って・・・。

茜「神様、かつこいい」

水鳥「あんな、茜・・・。」

シードがいようがないが、このサッカー部そのものが心配ね。  
(汗)

なんだかんだで、俺達、3人合格した。

そして、次は本物の試合！！燃えてきたあ！！！！



優理「拓人！」

神童「優理……。優理は……マネージャーなんだよな……。  
」

優理「うん。」

神童「フィスフセクターのこと……話すよ。」

ふふ、来た……。

神童「勝敗指示もされて得点まで決まってるんだ……。」

優理「……大変だね……。だから、私にマネージャーやるな  
って……言ったのね。」

神童「なんか……ごめん……。」

優理「謝らなくてもいいよ……。サッカー続けるために、フィス  
フセクターの指示に……。したがってればいいから……。」

そうよ、永遠に……。ね。

次の日

確か、次の勝敗は3 - 0に雷門の負け・・・。

指示通りに・・・がんばってね・・・。

雷門のみなさん・・・。

神崎「楽しみだぜ！」

バスの中うずうずする3人。

松風「先輩達のかっこいい姿・・・みたいなあ。」

残念ね、無様な姿しか・・・見られないわ・・・。

神童「っ・・・!!」

あー、怒ってる・・・ってか怒るよね・・・普通・・・うん・・・。

試合が開始される。

先輩達がパスし得点しようと見せかける。

神崎「せんぱーい！！パスー！！」

しかし、無視。

神崎「チツ……。1年だって……。」

松風「ハア、ハア……。」

神崎「松風！！」

松風「追いつけないや……。」

西園「ハア、ハア……。ハア……。」

それくらいで息切れしてたら、まだまだだな。

神崎「南沢先輩！！パスー！！」

南沢「……。っ。」

パスがきた……。しかし……

相手のボールを奪われる。

もうっ！！あんなみみっちいパスするから……。本気になれよ！！

この時はまだ……。気づかなかった……。。

松風「あれ……。？」

神崎「……。……。なんか変だ……。。」

薄々だが気づき始めた。

神崎「わざと……。？」

西園「……。あつ……。。」

前半終了

松風「どうして！？どうして本気でサッカーやらないんですか！？」

そして3人に告げられたのはフィスフセクターの存在。

すべて……。聞かされた。

神崎「そんなん……。！！！！皆が反抗すればいい話じゃねえか！！！！」

バカね……。それができないから……。皆……。

神童「お前に何がわかる！！！」

神童の怒鳴る声。

神童「俺だって・・・俺達だって・・・やりたいよ、本気のサッカー・・・でも！！！！サッカーをやる機会まで失いたくはないんだ！！！！」

松風「・・・・・・・・。」

神崎「だからってなあ！！！」

優理「キャプテンに口答えする1年は退部してもらっ他ないわね。」

神崎「なっ・・・転校してきたお前が・・・・・・・・。」

神童「黙れ！！！！！」

神崎「つ・・・・。」

そして後半が始まる。

松風「俺達だけでもやろう。」

神崎「ああ、俺達だけでも得点しよう。」

西園「うん。」

しかし先輩がうまくパスをしない。

松風「くっ……。」

神崎「ツチ……。おい、キャプテン!!! パス……。受け取れええええええ!!!」

だから先輩に敬語使えって……。

優理「ありゃ、人間として問題ありそうだわ……。。」

キャプテンにパスを回し続ける松風と神崎。

そして、神童は遂に、ゴールを入れてしまう。

1点取り、そのまま後半は終了。

田舎「.....」

## 田舎監督登場（前書き）

冒頭は、オリジナルシーンです。



## 円堂監督登場

きれいなピアノの音色が聞こえてくる。

なんなんだろう。

とてもきれいな建物。

シャツと神童がカーテンを開ける。

神童「わっ。優理！」

優理「拓人！！こっ……この豪華な家……拓人の家だったの！？」

神童「そうだよ、家……入る？」

優理「いいの？ありがとう。」

神童「ハア。」

優理「ため息ばかり吐いてると幸せなくなるよ……ってそうも  
いらないか。この前の栄都学園との試合。」

神童「俺が……ゴールを……。」

優理「気にしないでよ悪いのは……」

フィスフセクターに逆らう、

優理「松風と神崎と西園でしょ。」

神童「だけどつ……。俺のせいで、久遠監督が……。」

確かに、あの監督……何考えてるのかわからないけど……

危険……なのよね。

クビになって……正解、正解。

新しい監督をフィスフセクターが支配する。

それで、それで……！

神童「興奮……してる？」

優理「あ、ちょっと、ここが豪華だったから……。」

こんな言い訳……通じないよね……。

神童「そうか……。」

とピアノを弾き鳴らす。

あ……通じた？

きれいな音色……。

神童「つ……！」

ガン！！

急に美しい音色から乱れた音色に変わった。

優理「拓人……？」

神童「つ……！つ……！」

泣いちゃった……。私がいるのに……。

もしかして……。私が本気じゃないって……。気づいてるのかな……。

だから……。心が不安定？

神崎「松風……いや、天馬！パス！！」

松風「わっ……んっ……！！」

ボールが西園の方に転がる。

西園「天馬」。

松風「あ、ごめん、ごめん。」

するとパッと神崎に奪われる。

西園「ああっ！！」

神崎「このスピードでも……キャプテンには敵わなかった……」

俺の得意なサッカー。

サッカーは・・・俺の夢。

いや、俺だけの夢じゃねえ・・・な。

父さんの・・・夢。

かなえてみせるさ。

そして、父さんが楽しんでたあの頃のサッカーを・・・取り戻す。

神崎「やるぞっ！！！！天馬ア！伸介ッ！！」

松風・西園「うん！」

すると、

木野「天馬！」

松風「あ、秋姉！！」

ん・・・すごくかわいい人。

木野「あ、部員？」

松風「うん、神崎聖也と西園伸介って言うんだ。」

木野「へえ……。そうだ、今日家で夕飯食べていかない？」

三人「えっ・・・！？」

木野「おごつてあげるわ。」

三人「やったー！！！」

次の日。

朝練。

神童は休み、監督はいない。

みんなの集中がない。

神崎「先輩・・・！なんで、練習しないんですか！？」

南沢「誰のせいだと思ってるんだ？」

速水「そもそも、キャプテンと監督がいなきゃ・・・。サッカーなんてやってられませんよ。」

神崎「だからって・・・！！！」

葵「聖也くん！！！」

西園「やめなよ、聖也。」

チツと舌打ちをする。神崎。

ハア、拓人結局来なかったなあ……。

このままこなきや皆のやる気がでない。

サッカー部は廃部でシードの役目は終わりなんだけど……。

手ごたえというか……なんだ……つまらないというか……。

いや、なかなか進まないより進んだ方がいい……。

なんで、複雑な気持ちになってるんだろう……。

水鳥「優理！優理！」

優理「ハッ……！何？」

水鳥「さっきから話しかけてるのに……。やっぱり、神童がないねえと……。」

優理「そっじゃない。手ごたえというか……。」

水鳥「てごたえ？」

優理「あつ……。なんでもない……。」

あっ・・・あぶなっ・・・。

速水「はあ・・・。雷門サッカー部は終わりだ・・・！」

「それは違うな。」

そこに現れたのは・・・

全員「！！！」

音無「久しぶりです！」

円堂「円堂守・・・。今日からこの監督だ！！！」

神崎「うわああああああああ！！！！マジか・・・よ・・・。うっ・・・。うれすぎて・・・ああああああ！！！！！！！！！」

西園「本物だ！」



そして、円堂は練習場所、河川敷と言う。

しかし、もうフィスフセクターに逆らいたくない皆は練習には来なかった。

来たのは松風、西園、神崎のみ。

神崎「あっ……うう……。あの……神のゴールキーパー……  
円堂守様監督と……。ああー！」

円堂「円堂でいい。さて、松風、お前はドリブルが得意だったよな。」

松風「はい。」

円堂「松風はコーンでドリブル練習、神崎……お前は……。」

ドキドキドキ……心臓の音が……。聞こえる……。

ハア、ハア、ハア……。

円堂「お前は、確か、ボールを奪うのが得意だったな。」

神崎「は……。い。」

うわっ・・・俺・・・がちがちだ・・・。

円堂「ボールを奪ってパスにつなげることは、とても大事な役割だ。・・・それができないと・・・チームワーク・・・連携というものがとれない・・・。とにかく、正確にボールを奪って正確にパスをする・・・。まずは狙ったところにボールを当てることだ。」

神崎「はいっ！！！！」

燃えてきた・・・。

神崎「うおおおおおおお！！」

円堂が作つた的に当てる。

だがそれが跳ね返り顔面直撃する。

音無「神崎くん、大丈夫？」

神崎「大丈夫です！」

ニッと笑う円堂。

霧野「・・・・・・・・・・」

あれ……。蘭丸くん……。

優理「先生、ちょっと……。用事思い出しました……。帰ります。」

音無「え、ええ。気を付けてね。」

優理「蘭丸くん!!」

霧野「優理……。」

優理「来てたんだ……。」

霧野「……。神童のところ……。いかない?」

優理「う、うん。」

あ、……。ダメ……。言っちゃった……。

霧野「神童、元気だせよ。」

神童「うん……。」

優理「ねえ、今日新しい監督が来たの。」

霧野「誰だと思う？」

神童「誰って……。」

霧野「円堂守。」

神童「えっ……。」

霧野「それりゃ、だれでも驚くよな。」

確かに。

というか、私も。

なんで……本気のサッカーを指導する監督が……。

霧野「練習場所は河川敷。誰も行かないだろうな。新入りは来るだろうけど。」

神童「……。」

三人の練習の中、

橋の上に霧野と神童と優理が。

近くで南沢以外の部員が見ていた。

円堂「皆、いるんだろう。」

「!?!」

円堂「出てこい。」

そういわれ、出てくる皆。

円堂「一本シユート練習だ。」

神崎「っ・・・!」

円堂監督の前で恥ずかしいマネは・・・。

そして松風以外は皆成功。

そして・・・

円堂「・・・次は剣城、お前だ。」

剣城「・・・!」

全員「!?!???」

神童・霧野「!!」

あ……あ……円堂監督は、京介がシールドだと気付いてないの……?  
・?

それとも、天然……?

剣城「デスソード!!!」

剣城が放った必殺技、デスソードが円堂に向かって一直線。

剣城以外「!!!!!!」

ああ、やつちゃったよ、京介……。

しかしスツとかわす。

全員「!!!!!!」

神崎「剣城!!! てめえ……!!! 円堂監督に……!!!」

あ……。ダメだ。落ち着け……。

神崎「剣城!!!」

このままでは神崎はキレることは確実。

剣城「……………」

円堂「よし、今日はこれで終わりだ。明日、サッカー場で待ってる……………」

変わった監督だな……………。いろんな意味で。

優理「ねえ、京介……………」

剣城「……………」

うわっ…………。機嫌悪そう…………。当たり前か、うん。

優理「円堂守が監督になるって知ってた？」

剣城「知るか！」

優理「…………。フィスフセクターは何を考えてるんだろう……………」





## キャプテンの資格

神童「俺、退部します。」

円堂に退部届を渡す。

神童「では。」

去る神童。

剣城「……………」

神童「……………！」

優理「え？神童がやめた？」

剣城「だよ。」

一言で去る。剣城。

全然読み込めない・・・。

もつと話を聞きたいけどここ学校だしね・・・。

でも、よく考えたら当然かもしれない・・・。

ゴールを決めた上、キャプテンだから・・・。

でも、納得いかない。フィスフセクターに逆らったのは・・・松風と神崎なのに・・・!!

優理「また、家にお邪魔しちゃってごめんね。」

神童「いいよ、別に。付き合ってるんだから。」

う、心に草グサツとくる・・・。

優理「やめるの?」

神童「ああ。」

すると松風が来たということをメイドから知り、入れた。

なんで・・・あんな奴をいれるの？

松風「なんで・・・どうしてやめるんですか！？キャプテン！！」

神童「俺はもう、キャプテンじゃない！！」

そうして、松風と神童は言い争いになる。

神童「帰れ！！！！」

松風「・・・わかりました、生意気言つてすみません・・・あの、  
・・・俺・・・見たいんです！！キャプテンのフォルテシモが！！」

神童「帰れ！！！！」

松風「帰りません！！！！」

そして、遂に松風の熱意に打たれ、見せることに。

神童「フォルテシモ！！！！」

西園「わあ、本物だ！！」

神崎「やっぱ、雷門サッカー部員が放つ、必殺技は一味違うなあ・・・。」

そして去ろうとする神童。

松風「あの、いつか・・・本当のサッカーできるようになったら・・・戻ってきてくれますよね!？」

松風のデリカシーのなさにキレル神童。

そして松風からボールを奪う。

神童「俺をぬいてみる!!」

神崎「それならっ・・・!!」

西園「ダメだよ、ここは天馬が・・・。」

神崎「じゃあ、俺はなんのために来たんだよ!？」

松風「絶対、抜かして見せます。」

しかし、神童のスピードにボールをキープするのが精いっぱいだった。

だが・・・

松風「そよ風ステップ!!」

必殺技で神童を抜き去った。

松風「やった……。」

神童「必殺技……。」

神崎「やったな!天馬!」

次の日。

天馬のことで少し心を入れ替えた神童。

そこへ……

剣城「やめたんじゃないのか?」

神童「お前には、関係ないだろ。」

剣城「次のホーリーロード……。一回戦目、2 - 0で雷門の負けだ。」

神童「!!」

去つていく剣城。

神崎に秘められた過去、欺き

部活が終わり、家に入る。

神崎「だいま……って誰もいないか。」

テーブルの紙切れがあった。

今日も温めて食べてね

ああ、朝の残りか……。

母さんは仕事に出かけてほとんどあったことがない。

俺は一人っ子。

だから家には誰もいない。

俺は昔からサッカーが大好きだった。

お父さんは昔、サッカー部の監督をしていた。

その頃は俺の大好きなイナズマジャパンがまだまだ弱小チームだった。

でも、だんだんと強くなっていった・・・。

父さんもよく、雷門と試合したって・・・言ってたな・・・。

神崎「父さん・・・。」

父さんは自分達のチームをフットボールフロンティアで優勝させた  
いって言っていた・・・。

・・・けど・・・



キイイイイイン

ドオン！！

ピーポーピーポー

「父さん・・・！どうして・・・！！俺と一緒にサッカーやるんじゃないかったのかよ・・・！？一緒にフットボールフロンティアで優勝するんじゃない・・・なかったのかよおおおおお！！！！！」

俺の父さんはサッカーの練習の帰り・・・俺を庇い事故にあった・・・。

「う・・・あ・・・父さ・・・うわああああああっ！！！！！」

だから・・・決めたんだ・・・！！

俺は絶対ホーリーロードで優勝するって・・・！！！！

「本気」のサッカーで！！！！

父さんが言っていた・・・昔のサッカーで！！！！！！

神崎「何が・・・何がフィスフセクターだ！！！！！！熱いサッカー奪つて・・・何が・・・何がしたいんだっ！！！！！！」

誰にいうわけでもなく叫んだ。

神崎「ハア、ハア、ハア……。」

ピンポン

神崎「わっあ……。はい。」

カチャツとドアを開けると……

神崎「三国先輩……!」

三国「忘れものだぞ。」

わっ……。スパイク忘れてた。

神崎「わっ……。ありがとうございます。」

三国「……。親、来てないのか?」

神崎「はい、俺は母子家庭で……。」

三国「そうか……。もう食べたか?」

神崎「はい、一応。」

三国「じゃあな。」

ハア、叫んでたの気づかれないで良かった・・・。

皆、やりたいんだよな・・・。本気のサッカー・・・。

神崎「その点、剣城って奴は・・・！！！」

マネージャーだって皆が本気出すことを望んでるよな・・・。

神崎「誰でもいいから心情を聞くか・・・。そういえば、優理先輩の家ってどこだろう。」

一方

神童「本当に泊まるの？」

優理「ごめん、迷惑だった？」

神童「いや、いいよ。」

朝っぱらから京介の機嫌悪いからもお・・・。

というか、毎日だと思う。・・・うん。

神童「あのさ、今度・・・優理の家に行ってもいい？」

優理「はっ・・・！？だっ・・・ダメよ。汚いし・・・。それに、ほんとなんにもないし・・・。」

神童「それでもいいよ、行きたい。」

優理「ダメっ・・・！ー！！」

わっ・・・声が上ずった・・・。

神童「あ・・・ごめん・・・。」

優理「あ・・・いや・・・ごめん・・・。」

ああ・・・。ダメ・・・。どうすれば・・・。

神童「あ、夕食の時間だ・・・。」

優理「気分変えようね・・・。」

欺くはずが、逆になっちゃったなんて・・・。

## 次の日

神崎「だあああ！！なんでホーリーロードが近づいてるのになんで練習しないんですかあああ！！」

全員「……………」

松風「……先輩……………」

優理「仕方ないでしょ、ホーリーロード一回戦目は、2 - 0で雷門の負けなんだから。」

円堂「！」

拓人達がやってることは正しい……………。けど。

西園「僕は勝ちたいです！」

松風「俺も勝ちたいです！！」

神崎「なんで、マネージャーが口出すんだよ！！！！」

神童「神崎！！」

なんでって……………。

神崎「何負けろ的なこと言ってるんだよ！！本気のサッカー……………見

たくないのか!？」

神童「神崎!!...・優理は...・俺達の本気でやりたいけどやれない気持ちをよくわかってる...・。それを踏みにじるようなお前は...最低だ!!...!」

神崎「えっ...・!？」

欺けた...・ということ...・ね。

なんで...・。なんで俺が怒られなきゃいけないんだよ...・。

どうしてっ...・!？」

## ホーリーロード開幕

練習をする、松風と西園と神崎。

あらら、やってる……。

優利「拓人はフィスフセクターの指示に従うの？」

神童「わからない……。俺は、本気でサッカーやりたいけど……皆が……。」



優利「……。」

は……？

わ、私……欺けなかったの……。

そういえば、私……シードらしいこと全くやってないよね……？

そして、遂にホーリーロードが開幕する。

でもたった3人じゃ勝つことなんか出来ない……。それが……  
雷門の運命<sup>さだめ</sup>

試合早々、全く、本気を出さない1年以外の部員。

ボールを持つ神崎が囲まれる。

神崎「チツ……！信助！ヘディングを頼む！！」

高いパスを渡す。

西園「いづくぞおお！！！！」

ジャンプするが……

西園「うわぁ！！」

天河川中のラフプレーにより転ぶ。

「おいおい、本気かよ？」

神崎「くっ……！信助……うわぁあ！！」

「邪魔だ！！」

吹き飛ばす神崎。

松風「聖也！！……行かせない！！」

追い掛ける松風。

しかし、ついていけない。

松風「う．．．！」

神崎「俺に任せろ！！」

相手から必死にボールを奪おうとする神崎。

「悪いね．．．！ゴール．．．決めさせてもらつよ。」

俺は．．．負けるわけには．．．。

初戦で．．．！！

神崎「させるかああああああ！！！」

ボールを奪う神崎。

浜野「ありゃ、どうみても本気．．．。」

倉間「チツ、本気かよ。１年．．．。」

速水「ひええ．．．。」

車田「本気だしたところでかなうわけがない。」

天城「奴らのラフプレーのすごいド。」

南沢「あいつら、ボロボロにされるんじゃないの？」

霧野「神童は．．．？」

とかなんとか先輩達がやってる間に・・・

神崎「うおおお!!」

松風「聖也!パス!!」

松風がパスを渡すが・・・

ボールを奪われる。

神崎「すまない!天馬!!」

西園「先輩!!」

しかし、動かない先輩達。

遂に、ゴール手前までくる。

松風「ダメだ・・・!」

しかし、

神童「はあああああ!!!!!!・・・天馬!!!!!!」

パスをする神童。

3人「キャプテン!!!!!!」

「な、なんだと・・・!?!」

剣城「チツ・・・。」

優利「ありやりや・・・。私の忠告も聞かないで・・・。目にものを味わうだろうに・・・。」

剣城「神童を欺くんじゃなかったのか?」

優利「仕方ないでしょ・・・。1年の存在は大きい・・・。」

とかなんとかしている間に・・・

神童「フォルテシモ！！！！」

鮮やかにゴールを決める。

神崎「本気になってくれたんですね？」

神童「ああ、昨日はすまない…………。」

松風「キャプテンがいれば、百人力です!!」

しかしあとからラフプレーで巻き返される。

そしてゴールの前にくる。

神童「く・・・!!」

「まだ、諦めないのか・・・。そういえばお前、シードでもないのに化身が使えるだったよな・・・見せてやるよ・・・シードが使う・・・本物の化身を!!!!」

そして生み出される・・・

「鳥人ファルコ!!!!」

神童「化身・・・!!」

「ファルコ・ウィング!!!!」

神童はまだ化身をコントロールできず

化身の必殺技が迫る。

ドオン！

3人「キャプテン！」

神童は吹き飛ばれ、ゴールを守った三国は、ボールの直撃を浴び、同点になる。

霧野「大丈夫か？神童。」

「化身もコントロールできない奴がフィスフセクターに齒向かうなんてな。」

「もういいだろう、前半終了だ。」

円堂の言葉を受け、後半が始まる。

しかし、ラフプレーとまわりが本気を出さないのに苦戦する4人。



神童「松風!!」

松風「はい!・・・聖也!」

いいパス回しだったが・・・

神崎「くう・・・!」

足を引つ掛けるというラフプレーでボールを奪われる。

そして、ゴールに近づく。

「終わりだ!!」

しかし、

ボールを受けとめる三国。

4人「!!」

三国「おまえら・・・頑張ってるんだな・・・。ゴールは任せろ!

点は入れさせない！！！！」

4人「はい！」

ゴールに向かっていくが・・・

西園「わぁ！」

再びこちらのゴールに近づく。

「鳥人ファルコ！！！！」

化身が生み出される。

「ファルコ・ウィング！！！！」

化身シュートを体で止める神崎。

神崎「うおお！！！！！！」

化身が生み出される。

神崎「精霊フェアリー！！！！」

しかし、化身をコントロールできず吹き飛ばす。

神崎「わぁ！！！！」

神童「化身シュートは俺が止める!!!!」

神童も化身を生み出す。

しかし・・・

化身は敗れる。

神童「うわあ!!!!・・・・・・やっぱり、化身シュートは止められないのか・・・。」

三国「いや、確かに化身シュートの力は弱まった!」

ゴールに迫る化身シュート。

三国「バーニングキャッチ!!!!!!」

化身シュートは止められた。

「何・・・!?!」

三国「松風!!」

ボールが渡される。

そして、攻めていく、

松風「キャプテン!!」

神童にパスを回す。

神童「神のタクト!!」

神のタクトで道筋を作りパスを回していく。

三国「今のお前なら化身を使いこなせるはずだ!」

神童「頼む!!お前の力が必要だ!!奏者マエストロ!!」

そして化身シュートを放つ。

神童「ハーモニクス!!!!」

化身シュートにより2 - 1で雷門が勝利する。

円堂「よくやったぞ!皆!」

剣城「チッ。」

優利「やっちゃた、怒られるのは私達なのに。」

## 兄と弟

しばらく剣城の欠席が続く。

クラスからもシードとしての配慮もあり、とくに気にも止められることはなかった。

むしろ、気にしてはなかった。

サッカー部はホーリーロードでの得点でフィフスセクターに知られてはいるもののなんらの動きはない。

円堂もやめさせられるまでにはいかなかった。

## 部活動

円堂「出席をとるぞ。」

神童「……剣城……。」

速水「妙ですねえ、ホーリーロードでは得点したのに、フィフスセクターからなんの動きがないだなんて……。」

倉間「潰すための計画でも立ててるんじゃないの？」

速水「ひゃあ……!」

神崎「とーにかくっ!ーこのすきに練習、練習!ーですね、監督様」

円堂「監督でいい……。それじゃあ皆……」

ゾロゾロ……

神崎「ツチ……。」

皆は練習することなくただ遠ざかる。

神童「皆……。」

松風「キャプテン!!」

神童「……5人でもやるぞ!!」

松風・西園・神崎「はい!!」

）  
）

音楽が流れる。

優理「あ……。」

音無「校内は携帯禁止よ。」

優理「すいません……。出ていきます。」

正門の前で携帯を開く。

ああ、黒木さんじゃなくて良かった。

優理「もしもし?」

剣城「おい、なんで出ないんだよ!？」

優理「なんでって……。学校だもの……。仕方ないでしょ。」



剣城「今日は俺が兄さんの見舞いに行くから。」

優理「5日間連続なんだけど・・・。」

剣城「黙れ、マネージャー。」

プツン。

切れたらしい。

優理「なぁに、この姉と兄との態度の差は。」

）  
）

優理「げえっ！！今度は黒木さんっ……！！」

出た。

優理「もしもし……ええ、はい……すぐに向かいます……。」

はあ、面倒だな……。

ここはフィフスセクターの本部……なんだろう……1番えらい人がいるところ（笑）

あそこにいるイケメンは……イシドシュウジ……なんだ……1番えらいというか……ゲーム的に言えば……フィフスセクターのボスっていうか。

イシド「さて、君の女シードとしての？1の座は守り続けたい・・・  
そうでしょう。」

優理「・・・はい。」

イシド「・・・もっと・・・そうだね・・・派手に目立ってくれないか？」

え・・・？

優理「あ、あの・・・お言葉ですが・・・どういう意味で・・・？」

イシド「・・・。わからないのか・・・。雷門のつまらないマネー  
ジャーなどやめ、弟のように他のチームに所属するというのは・・・。  
」

な、何わけのわかんないこと・・・。

最初にマネージャーとして翻弄しろって言ったのはアンタじゃない。

優理「そんなつ・・・！！弟は・・・最近・・・不調なんです・・・  
！！！！そんな弟を見ることができるのは姉である私です。・・・  
確かに派手ではないですが・・・弟のサポートをしていきたいの  
です・・・！！！！」

イシド「・・・。悪かったよ、君の弟を思う気持ちを利  
用して・・・。」

な、なんなのよあいつ！！！！！！

優理「あれで本当に優一兄さんの手術代を払ってくれるかしら・・・」

とぼとぼと病院へ。

京介に怒られるだらーけど。

優一兄さんの顔最近みてないしな・・・。

というか意外とマネージャーの仕事って大変なんだよね・・・。

ガラッ

優一「あ、董！」

そうそう、本名は剣城董……。

優理って名は昔人見知りが激しかったからわざと偽名使って拓人達に名乗ったんだ……。

剣城「姉さん……なんで来たんだよ……っ!!」

やや怒ってる……。

もうっ……。本当に優一兄さんとあたしとで態度が違うんだからっ……!!

優一「元気そうだね。」

董「うん、……というかそれはこっちのセリフだよ。」

ああ……。なんで優一兄さんと京介でこんなにも性格違うのかな……。

剣城「……チッ……。」

ちよっ・・・舌打ちした!?

剣城「兄さん、俺・・・もう帰る・・・。」

優一「うん、またね。」

最後にあたしをにらみつけて去って行った・・・。

ハア、ほんと・・・なんで・・・こんな性格違いの!?

優一「・・・最近来れてないね、小6までは毎日来てたのに。」

董「う・・・うん。」

優一「マネージャーの仕事が忙しいんだね。」

董「意外と部員よりも・・・。」

蘭丸くんと同じこと言ってる・・・。

優一「へえ・・・。」

長いこと話した。

時間って残酷で・・・

すぎていくのは早い……。

あの日だってそうだった……。

あの時……あたしが……ちゃんと……京介を見ていれば……

次の日

剣城「次の試合に俺を出してください。」

南沢「俺、退部します。」

この言葉が俺達の心に響いた。

円堂監督はそのどっちも引き入れた。

神童「本当の勝利を目指すんじゃないんですか!？」

退部は仕方ないとして、なんで……シードを……あんな奴を……

・試合なんかにつ……………!!!

神崎「なんであんな奴を試合に入れるんだよ!?!」

優理「……………。」

南沢先輩がやめたからしかないでしょ。

円堂「本当勝利を目指すこそだからだ!!」

こそだから……………意味が……………意味が分からないっ……………。

俺はあんな奴と……………

神崎「だったら俺、次の試合はベンチにいます。」

全員「!!」



そのまま去っていく神崎。

神童「神崎っ！！！！」

その日の夜。

天馬が珍しくふさぎ込んでた。

神崎「よ、天馬。どうしたんだよ。」

松風「・・・これで本当にいい・・・のかな。」

神崎「だよなあ。」

松風「剣城のことじゃない。」

神崎「えっ？」

松風「フィフスセクターに逆らう事。」

神崎「何言ってるんだよ！？いいんだよ！！！！！」

すると状況を察した信助が・・・。

西園「聖也が去った後、先輩達に責められたんだ・・・。サッカー部を潰しているのは天馬だって・・・。」

神崎「なんでっ・・・!!悪いのは・・・剣城とフィフスセクターじゃねえか!!!!!!」

西園「僕に言われても・・・。」

ゆるさねえ・・・フィフスセクター・・・。

## 後悔

先生「今日は席替えするぞ。」

えっ・・・。

じゃあ蘭丸さんと拓人と離れちゃうの？

シードだから下手に他人と接触したくないのに・・・。

くじを引いた。

あ・・・5番・・・

隣の席・・・6番だよね・・・だれだろ・・・。

速水「あー・・・5番の人居ますかあ？」

優理「速水くん!!」

速水「あ、山里さん・・・。」

優理「私、5番だよ、よろしくね。」

速水「・・・はい、よろしくお願いします・・・。フウ・・・良かった。」

優理「どうして？」

速水「話したことない人の隣だと気まずいじゃないですか。」

わかる・・・わかるよっ・・・!!

優理「私も・・・。マネージャーだと放課後も削っちゃうからあんまりサッカー部以外の人と話したことないのよ。」

まあ・・・確かに・・・話しやすい人がいいけど・・・

後ろに拓人、蘭丸くん、横に速水くん、前に倉間くん、浜野くんつて・・・

サッカー部に囲まれすぎ!!!!

視線が痛い・・・。

優理「わあっ・・・皆サッカー部だね。」

速水くんはホッとしてるけど・・・

怖い・・・バレそう・・・。

霧野「良かったなあ、サッカー部ばかりじゃん。なあ、神童。」

拓人と蘭丸はまた隣か・・・。

神童「ああ、優理・・・。」

ニコッと笑った。

ちよっつっ・・・やっ・・・

倉間「なんだ？最近、2人でいるところよく見るけど・・・。」

浜野「付き合ってる系？」

優理「っ・・・あ・・・。」

神童「お前達には関係ないだろ？」

浜野「顔真っ赤!!」

霧野「へえ・・・。まあ、キャプテンとマネージャーが付き合ってたよくあるよねえ。」

神童「・・・!!」

ハア・・・違う意味でも大変そう・・・。

だんだんと

ホーリーロード2回戦目が近づいてきた・・・。

よし。

次の日

優理「ねえ、皆は・・・2回戦目で本気だすの？」

浜野「え・・・あ・・・」

速水「出せるわけじゃないですか・・・」

倉間「そんなことしたら、サッカー部は潰されるよ。」

霧野「だよなあ・・・」

すると皆の視線が神童に集まる。

神童「俺は・・・！！俺はっっ！！絶対勝利するっ！！！」

優理「どうしてっ！！サッカー部が潰れちゃうんだよ!？」

神童「ありがとう、．．．俺のために．．．。だけど．．．俺はっ．．．！！勝利を目指す！！」

どうして．．．！！

どうして松風の．．．神崎の．．．なんで乗るの！？

優理「絶対．．．絶対後悔するよっ！！！！」

私のその後飛び出してしまった．．．。

シードになって後悔してるのは．．．。本当は私．．．．。

それが痛いほど身に染みってくるが．．．。



優一「フフ、仲が良いね。」

剣城「よくななかねーよ。」

董「ハア……。」

優一「そういえば、最近本当に早くくるね、サッカー部はいいの?」

剣城「あ、ああ。」

董「最近忙しかったからすぐ終わったの……。」

苦しい言い訳……。

優一「サボり?」

剣城「っ!! 違うよ、兄さん。」

痛い……いろんなことが……。

普通……普通の学園生活送りたかったよお……。

優一「董……っ!？」

剣城「姉さんっ!!!!」

あ……泣いちゃった……。

董「優一兄さん、ごめんなさい……!!!!」

逃げるように病室を出た。

剣城「っ……!!おい、待てよ!姉さんっ!!!!」

京介の出ていく。

優一「董……京介……。」

剣城「姉さんっ!!何やってんだよ!?!」

董「うっ……ごめん……京介……。」

剣城「ったく!!バレたら絶対承知しねえ……!!」

董「私……後悔してる……。」

剣城「……!?!」

董「シードになったこと……。」

剣城「なら、やめちまえよ!!!!兄さんに怪我させたのは俺なんだ

からっ！！！！」

董「違うよっ！！私が・・・私が悪いの・・・っ！！あの時・・・私が京介を助けてたら・・・あの時・・・木にボールを引っかけてなかったら・・・！！！！」

剣城「本当に怪我を負わせた奴の気持ちなんかわからねえお前に言われたくねえよ！！！！！！」

董「京介っ・・・！！」

そして・・・ホーリーロード2回戦目が開幕。

京介が・・・試合に出る。

つて・・・神崎来てんじゃん!!!

水鳥「なんだ、来てんじゃん。」

神崎「ふん、剣城が余計なことしないよーにな。」

なら、試合だろよ。

で・・・

ピピッ

はい、始まりました。

剣城「……………」

全員「!!!!????」

神崎「あ……。」

っておおおおおい!!!

いきなり、剣城オンゴールしやがったっ!?

神崎「剣城めえっ!!!!」

この先の展開が……全く読めない……。

## V S 万能坂中！！雷門の覚醒の訪れ

神崎「くっ．．．、剣城の奴．．．いきなりオンゴールを決めやが  
って．．．。」

水鳥「横でごちゃごちゃ言っんなら、出ればいいだろ。」

神崎「出れるかよ！！！」

あんな、あんな奴と一緒になんかやったら．．．。

本気でできるわけねえだろ．．．．．。

松風「キャプテンー！うっ．．．わあああっ！！！」

次々に、万能坂中のラフプレーによって倒れていく。雷門イレブン。

私も・・・シードとして動いていたことはあるけど・・・

こんなにひどいラフプレーなんて見たいことない。

優理「男はやばんでいやね・・・。」

神童「うわあっ!!！」

松風「キャプテンっ!!！」

無理矢理、転ばされた神童。」

茜「シン様っ!!！」

西園「僕だって……僕だってええええええ！！！」

「邪魔だつ！！」

蹴り飛ばされる。

西園「うわあッ!!」

松風「信助エッ!!」

水鳥「っ！あれは反則じゃねえのかよっ！？」

神崎「無駄ですよ、先輩。・・・審判が反則の瞬間をとらえられなければ・・・反則にはなりませんから。」

葵「しかも、他の選手がその瞬間を隠している……。」

水鳥「チツ、あいつら……潰しのプロか!!」

もう時間がねえな・・・。



松風「ハア、ハア……。俺は……。まだ……。あきらめない……。っ！！」

「いい加減諦めな、お前じゃ勝てない！」

松風「俺は……。絶対……。絶対……。っ！！勝つて見せる！！うおおおおお！！」

がつ！！

足を引っかけられ転ぶ。

神崎「見てられるか！！」

水鳥「神崎っ！！お前ができれば……。もう少し……。変わったんじやねえのかよ！？」

神崎「わかってますよ！！俺だって……。後悔してますからっ！！！！俺だって……。戦いたいっ！！天馬みたいに……。っ！！」

涙がポタッとズボンに落ちる。

神崎「天馬アアアアアッ！！根性だあああああつ！！！！」

松風「うんっ！！！」

剣城「……まだ懲りてないのか……。」

松風「剣城……俺は……あきらめない……。」

剣城「……なら、味あわせて……やるよっ！！！」

ドオン！！！！

松風「うわあっ！！！」

ボールが直撃される。

神崎「天馬っ！！！！」

静まり返るグラウンド。

松風「俺は・・・あきらめない・・・。」

「・・・仕方ないな。」

ボールを渡す。

「止められかな・・・俺達の・・・プレーを。」

松風「・・・やってやるっ！！！！」

天馬は相手ゴールに突き進む・・・。

すると横から・・・

ドンッ

松風「わっ・・・わわわっ！！！」

ボールを奪う・・・いや、無理矢理、足を狙った。

神童「天馬っ！！」

松風「大丈夫です！！」

剣城「（あいつら・・・まさかっ！！！！）」

「終わりだっ！！！！」

ドオン！！！

優理「……………」

この時……一体何が起きたのか……私にもわからなかった……。

わかってること……それは……

京介と……万能坂の奴等が口論になっていること……。

剣城「一生サッカーでなければいい……！？本気でそう思っているのか……！？？」

剣城「デスソード!!!!」

神崎「え……………」

神童「剣城が…………ゴールを…………。」

前半終了

私は無理矢理、京介を連れ出した。

剣城「なんだよ？」

優理「なんでゴールなんか・・・。」

剣城「万能坂の奴等が言っただよ!!!・・・松風が・・・一生サッカーできなければいいって・・・。」

優理「・・・あんたはそれでキレたの・・・。」

剣城「あんな奴等の腐ったサッカーなんか見たくもない。・・・だから・・・万能坂なんか俺が潰す。」

優理「・・・それで・・・いいの?」

剣城「ああ。」

優理「優一兄さんの・・・手術費・・・。」

剣城「・・・っ!!!!!!それはっ・・・それとこれとは関係ないっ!!!それはでいいんだよっ!!!!!!」

優理「矛盾してる。」

剣城「後半が始まる・・・。」

そのまま逃げに行った。

私は誓った・・・。

シードをやめ、皆に・・・真実を伝える・・・。

私がシードであり、剣城京介の姉であることを・・・。



雷門覚醒！！反乱サッカーの始まり！！！！

後半が始まる。

円堂「霧野は怪我か・・・。」

神崎「監督！！いまさら、情けないですけど・・・俺を試合に出してもらえませんか！？」

円堂「もちろんだ！！」

ニツと神崎にむけて笑う。

神崎「・・・わぁ・・・！！ありがとうございます！！！！円堂監督様っ！！！！」

神崎が入り一応、6人で挑むことになる。

万能坂がボールを先制してくる。

神童「ディフェンスに入れ!!」

松風・西園・神崎「はい!!」

前に出る神崎。

「さっき出てなかったやかましい奴か。」

神崎「ボールを奪うのは・・・俺の役目だ!!!!」

ぶつかり合った。

神崎「うおおおおおお!!!!」

背中に黒いものがうずまく。

円堂「…………あれは…………!!」

優理「化身・・・!？」

そういえば、神崎くん、一度・・・化身を出したことがあったけ・・・？

回想

神崎「聖霊フェアリー!!!」

終了

神崎「うおおおおおっ!!!!」

いける……!!化身が……出せる。

神崎「聖霊……聖霊フェアリーイイイツ!!!!」

化身で吹っ飛ばす。

「何っ……!?!」

「おおらあ!!!!」

スライディングでボールが奪われた。

神崎「させるかあ!!!!」

ドオン!!!!

体当たりでボールが転がる。

神童「ボールを取らせるなっ!!!!」

松風「でも……！ボールが遠い……っ！！」

もうダメか……と思われた時。

剣城「……。」

そのボールを取ったのは剣城。

そのままゴールに向かっていく。

神崎「剣城……！！」

あっという間にゴール手前まで来た。

だが……

優理「京介・・・！取り囲まれてる！！！！」

神崎「あのままじゃ、いつかボールを奪われる・・・っ！！」

剣城「チッ・・・！」

「フィフスセクターを裏切ったことを後悔しな！！」

剣城もボールを奪われないようキープしていた。

神童「剣城！！勝ちたいのは同じなら、俺にボールをパスしろ！」

松風「剣城！！」

あつ……！こいつら……本気で剣城を……フィフスセクターを……信じるつもりなのか……！？

神崎「キャプテン……！！どうして！？」

神童「……………。剣城！！！」

「さあ……終わりだ！！」

すると剣城は体制をたてかえ、神童にパスした。

剣城「勘違いするな、まだ・・・仲間になったわけじゃない。」

神童「わかってる!!！」

「フフフフ・・・ハハハハはっ!!!!！」

化身が生み出される。

神童「いけっ!!!!奏者マエストロ!!!!！」

化身同士のぶつかり合い。

神崎「うおおおお!!聖霊フェアリー!!!!！」

神崎も化身を生み出す。

しかし・・・

ドオン!!!!

神童と神崎は吹き飛ばされる。

神崎「ぐっ・・・!!！」

神崎「うわっ!!！」



松風「キャプテン!!」

西園「聖也!!」

ゴールに向かって一直線。

三国「バーニングキャッチ!!!!!!」

なんとか止められた。

「うおおおっ!!」

動かない5人、マークされる5人。

ボールが雨のように迫ってくる。

水鳥「なんで・・・なんでみんな・・・!!」

葵「こんなの、見てられないです!!」

優理「・・・・・・。」

拓人や京介・・・・反乱組はマークされてる・・・。

仮にマークを破っても、それまでにもつかどうか・・・。

水鳥「お前ら!!!!これを見てなんにも思わないのかよ!!!!??  
??」

車田・浜野・速水・倉間・天城「・・・・!!」

水鳥「皆・・・必死になって戦ってるのに・・・・!!!!お前らはこ  
れでも何にも感じないのかよ!!!!」

叱咤をかける水鳥。

優理「水鳥ちゃん……。」

遂に、化身を生み出した。

剣城、神童がマークを破ったが間に合わない。

間に合うとしたら、後ろにいる車田・倉間・速水・浜野・天城。

もう本当にダメだ……。そう思った瞬間！

車田「うおおおおおー！ダッシュトレイン！……しゅばおおお  
おおおっ！……！」

まるで機関車のように、走り、ボールを奪い取った。

松風「すごい！……これが……車田先輩の必殺技……！」

浜野「あっちゃー、やっちゃったかぁ……。仕方ないか！」

と乗る浜野。

天城「やるドオー!!！」

と天城も乗った。

速水「……。え？皆……。？わわわわっ!!！」

流されたように乗る速水。

次に、浜野にパスがまわった。

浜野「波乗りピエロ!!！」

ボールの上に乗ると、水が浮きだす。

相手はしばらくボールが奪えない。

しかし、ゴール手前で奪われ、相手ゴールに近づかれる。

天城「ビバ！万里の長城!!！」

すると大きな壁とともに地面が盛り上がり、先に進ませない。

「何っ・・・!?!」

松風「すごい!!先輩達すごいです!!!!」

パスをドンドンまわしたが・・・ボールが転がる。

その先には・・・

倉間「・・・・・・・・。」

倉間の足元にボールがあつた。

しかし動かない。

剣城「こつちだ!!!!」

パスにも応じない。

車田・三国・神童「倉間!!!!」

「もらつたあ!!!!」

スライディングしようとした時・・・

大きく空を舞うボール。

剣城にパスを回し、ゴールについた。

G Kも化身を生み出し、化身対決となる。

剣城「ロスト・エンジェル!!!」

「ガーディアン・シールド!!!」

ドオオオオン!!!

ボールがぶつかり、貫くか、弾くかの戦いになる。

優理「・・・京介・・・。」

負けないで・・・！頑張つて・・・っ！！

得点したのは剣城そしてそのままの勢いで神童にパスがまわり、疲労したGKは化身を生み出せずフォルテシモが貫き・・・

そのまま後半が終了・・・勝利した。

円堂「よくやったぞ！！皆！！！！」

次の日

京介以外は練習に参加してた・・・。

さて、そろそろ。

優理「あの・・・皆に大切な話があるんです。」

神童「どうしたの？優理・・・？」

優理「あのね・・・。私は実はシードなの・・・それで・・・本名は剣城堇で、剣城京介の姉なの・・・。」

「ええええええー！！！！！！」 （円堂以外）



## シードの打ち明け

神童「嘘……だよね……。？剣城の姉って……。シードって……」

声が震える神童。

ああ、私は拓人も傷つけた……。

後悔したって遅い。

董「私は剣城董として、雷門から去ります。」

円堂「ダメだ。」

全員「!!」

円堂「よくシードだっていえたな！！待ってたぞ！！！」

音無「ええっ！？・・・か、監督・・・知ってたんですか！？」

笑顔で堇を見る。

円堂「サッカーで皆を傷つけたなら、サッカーで誇りを取り戻せ！！！」

堇「私に・・・そんな資格ないです・・・。」

円堂「サッカーをやるのに、資格なんかない！！！！サッカーで嫌な思い出だけを残してほしくないんだ。」

堇「嫌な・・・思い出・・・イヤナキオク・・・。」

過去の記憶が再生する。

## 回想

堇「あ．．．ボールが．．．。」

堇がボールを木にひっかける。

京介「とってくるね。」

堇「私が!！」

2人が木に登る。

優一「危ないぞ! 2人とも! ! !」

私が無意識に木に登るのに邪魔な京介を払ってしまった。

その時．．．!!

京介「うわあ! ! !」

堇「京介っ! ?」

木から落ちる京介。

走ってくるお兄ちゃん・・・。

全てが・・・スローみたいに・・・。

ドン！！

優一「う・・・うつ・・・。」

董・京介「お兄ちゃん!？」

京介の下敷きになった。

私のせいで・・・。

足が・・・

アシガ

動かなくなった。

終了

董「い、いやあああああ！！！！！！」

神童「優利!？」

董「いやあああつ!!!!!私につ．．．!私にいい!!!サッカーを．．．やる資格なんかなああああいい!!!!!」

神童「どう．．．したの．．．?」

神崎「．．．そうだ。」

董「!!!」

神崎「お前にサッカーをやる資格なんかない!!」

神童「神崎は黙ってろ!!!!!!」

霧野「落ち着いて、董……。」

董「いや……。あ……。い……。ち兄さん……。」

ふわっと私を包み込む何か……

神童「落ち着いて……。董……。」

董「拓人……。」

私の意識が途絶える。

目が覚めると、保健室ではなく、マネージャー席に寝かされていた。

董「私……。」

神童「董……。」

董「拓人……、こんな私を……名前で呼んでくれるの……?」

神童「ひとつ、聞いていい……?……俺への気持ちは本当?」



董「うん……。」

次は、円堂監督が私の顔のぞく。

円堂「皆の結論はこうだ!!」

松風「董先輩は悪いことなんかしてませんよ!!やめないでください!!」

西園「董先輩はかせないマネージャーです!」

霧野「董は……大切な……存在だ。」

速水「まあ……シードだったんですし……いざというとき……助けてくれますよね?」

倉間「シードとしての実力が本当なら、協力してくれたら考える。」

浜野「ちゅーか、仲間が多い方がいい！」

車田「円堂監督の言うとおり！サッカー部のマネージャーとして協力してくれ！！」

天城「化身の出し方教えてほしいド！」

三国「俺は見捨てない！！」

水鳥「苦しんでる奴ほど強くなれるもんさ！！」

茜「ずっと友達だよ。」

葵「やめないでください、董先輩。」

神崎「俺は認めない！！！！！！」

松風「聖也!!」

神崎「フィフスセクターだぞ!?!?・・・サッカーを潰したシードを・・・誰が認めるか!!!!」

水鳥「神崎!!!!試合前から思ってたが・・・!神崎は、剣城が出場の時もお前は・・・・・・・・!!!!!!」

だから・・・

神崎「だからなんだ!?!?・・・うつ!シードは・・・最低最悪な・・・人間だ!!!!」

董「あ・・・。」

小さく苦し紛れな声を出す。

バシィィィ!!

水鳥が神崎の頬を叩く。

神崎「いつ!!っう!!……あ……。」

水鳥「まだわかんないのか!? 堇がどんな思いでシードであることを打ち明けたか……。最低最悪はお前だ!!!」

なんで……。!?

神崎「俺は……。間違って……。」

言い掛けた時

円堂「神崎の気持ちもわかる……。だが、俺は堇の気持ちもわかる。」

堇「ひっく……。う……。う……。あ……。っ……。づ……。っ……。っ」

めんなさい・ゆ・．．．ち兄さ・．．ん・．．ごめんなさい・．．  
．．．拓人・．．ごめんなさい・．．皆さん・．．!!!!」

神童「泣かないでよ・．．董・．．。」

董「うあ・．．ああん。」

しばらく我慢してたことが全て吐き出されて涙が止まらなかった。

落ち着くまで・．．拓人の家にいた。

京介のことも考えて、優一兄さんのことは何も言わない・．．。

ただ、苦しみだけを拓人に伝える。

董「私じゃ、暴走してる京介を止められない・．．私が京介を守らないといけないのに・．．!!」

神童「気が済むまでここにいていいよ・．．。一緒にいるよ・．．。  
」。

夜中に帰った。

家には監督がごまかしてくれたいらしい。

次の日の朝。

董「京介……！私……シードがやめたから！」

剣城「あつそ、俺はシードやめないけどな。」

董「京介、優一兄さんがそれで喜ぶと思うの？」

しかし、京介は出ていった。

董「すみません、監督・・・京介を連れていきませんでした。」

円堂「いいさ！…マネージャーの仕事！…！頑張れよ！…」

董「はい！！」

西園「いつけえ！…！」

西園くんは連絡してる・・・。

ぶつとびジャンプだって・・・。

あれ？松風くんがない・・・？

夕方

松風「董先輩、ごめんなさい!」

董「へ．．．?」

なんで謝るの．．．?

松風「実は剣城のあと付けて．．．お兄さんにあってしまいました．．．．。」

董「ええええええー!」

そんな．．．。

京介は超絶ブラコンだよ

董「．．．いいよ、別に隠すことじゃないし．．．。でも、恥ずかしいから誰にも言わないでね。」

松風「はい!」



帝国の猛攻！！

次の試合相手は帝国になっていた。

帝国学園の監督はイナズマジャパンの鬼道である。

しかも、帝国学園はフィフスセクターの支配下にあり一番、フィフスセクターへの忠誠が高いのである。

それを告げる円堂。

神崎「鬼道監督って・・・鬼道様って・・・あのイナズマジャパンの人ですよね！！????どうして・・・・?」

円堂「それは俺にもわからない・・・。」

音無「兄さん・・・・。」

速水「そういえば、フィフスセクターからの指示はないんですかあ?」

董「・・・それはないです、もはやここまで勝ち上がってきた雷門

イレブンに・・・勝敗指示を決めることは無意味なのです。・・・  
言うとなれば、負ける・・・ということ。」

車田「今更、負けることなんか考えられるか!!」

天城「本気を出すド!!」

皆の意気込む様子。

神童「じゃあ、必殺タクティクスの練習だ!!」

霧野「ああ!!」

再び、必殺タクティクス、アルティメットサンダーの練習を始めていた。

放課後・・・

神崎「あの、・・・董・・・先輩・・・。」

董「・・・神崎くん・・・。」

神崎「後輩なのに生意気言ってますみませんでした!!!!」

董「・・・か、かんざ・・・」

神崎「俺は最低です！！よく考えたんです！！・・・ていうか、天馬が言っていました！サッカーが好き、サッカーが好きだから、裏切りたくないから・・・シードをやめたんですよね？」

董「ふふ、ありがとう！」

ニコツと笑う。

神崎「・・・うつ・・・。」

なんだ・・・董先輩って・・・超かわいいじゃねえか！！

神童と付き合ってるって噂・・・本当なのか！！??

とつかこんなかわいい人が姉なんて羨ましいぜ、剣城が！

つか、剣城にもつたいない！！！！

対決当日の朝。

董「京介・・・」

剣城「出ないからな。」

言う前に言われちゃった・・・。

董「何も、協力しろとは言っていない・・・。シードとして出る必要があるんじゃないの？」

剣城「・・・・・・。」

まあ、あの万能坂戦の後で、シードとして動くのはきまづいのはわかるけど・・・。

董「京介!!」

出て行こうとする剣城を引っ張る董。

剣城「放せよ!!」

董「絶対・・・!出てもらうからっ・・・!!」

すると剣城は化身を生み出し、抵抗する。

董「現れよ・・・、光の戦士・・・勇者アウトレス!!!!」

とはいえ、玄関口のため、ドアにひびが入る。

剣城「……っ!!」

むりやり董を突き飛ばし、走り去っていく。

董「っ……いたた……、1つ違いだと男の女の差になっちゃっ  
うのよねえ……。せめて4つくらい違いは勝てたかもしれない  
けど……。待て!! 京介っ!!!」

追いかける董。

神崎「遂に、剣城は来ないのか……。まったく……。」

松風「……董先輩……。」

神童「信じる……。董が……。剣城を連れてくることを……。」

遂に、帝国戦が始まる。

キックオフは神崎。

神崎「おおおおおおお!!」

しかし・・・

ドオン!!

ボールを奪われる。

神崎「くそっ・・・!!」

ボールが高く飛び上がる。

西園「行かせない!!!ぶつとび・・・

「邪魔だ!!」

しかし必殺技は邪魔され失敗する。

何度も何度もゴールにボールが来る。

帝国は強い。

「皇帝ペンギン7号！！！！」

遂にはゴールを入れ、西園が負傷してしまう。

神崎「信助・・・！！」

再び、キックオフするのは神崎。

取り囲まれた。

神童「こっちだ！！」

パスを渡すも・・・

ドンッ！！

パスは失敗する。

神崎「あ・・・ぐ・・・！！させるかあ！！！！」

ボールが奪取した。

神崎「天馬ア！！！！」

ボールをパスする。

松風「よし！！そよ風ステップ！！」

うまくパスつなぎで相手ゴール前に神童がいた。

神童「フォルテシモ!!」

「フフ・・・!」

なんと、神童の必殺技であるフォルテシモを素手で受け止めた。

全員「!!」

剣城「・・・兄さん・・・。」

優一「・・・京介・・・、なんで・・・京介は試合に出ないの・・・?  
」

よく見るとサッカーの中継を見ている。



董「京介っ！！やっぱりここに．．．！！西園くん怪我したんだよ  
！？今は１０人．．．！京介がいないと．．．！！！！」

剣城「．．．．．」

黙る剣城。

優一「．．．京介．．．？」

不信任を覚えている優一。

董「京介！！！」

剣城「．．．．．俺．．．水．．．飲んでくる．．．」

逃げるように立ち去っている。

董「．．．．．」

もう、覚悟は決めた．．．。

言うしか．．．ないんだ．．．。

再び得点が入られていた。

神崎「ああ．．．！！！！俺が不甲斐無いから．．．！！」

神童「神崎だけのせいじゃないよ．．．。」

神崎「アルティメットサンダーをさせてください！！！」

神童「．．．神崎．．．。」

神崎「俺はテクニックはないけど．．．シュート力ならあります！！」

キャプテンである神童と、倉間が何度も失敗したアルティメットサンダー．．．。

神童「わかった。」

パスが流れ、イナズマのようになる。

天城「神崎！！」

神崎「うおおおおおー!!」

いけるか・・・!?

神崎「アルティメットサンダーアアー!!」

しかし・・・

真上にボールが行く。

神崎「うっ!!」

そのまましたに落ち、吹っ飛ぶ神崎。

神童「神崎っ!!」

松風「聖也!!」

倒れている神崎。

神崎「へへ、大丈夫ですよ・・・。1年が・・・でしゃばりすぎたかもな・・・。」

ほんとは、体中がすごく痛い・・・けど・・・

10人しかいない今・・・へこたれてる暇なんかねえ!!!

優一「・・・京介・・・。」

剣城「・・・。。。」

明らかに、さつきとは違う董と優一の表情。

まさか・・・と思った。

優一「全部・・・董から・・・聞いたよ・・・。」

剣城「・・・全部・・・。。。」

あの真剣なまなざしの董を見て・・・確信した。



信じる、信じない！それこそ信頼！！（前書き）

厨2病な題名ですよね・・・。

信じる、信じない！それこそ信頼！！

帝国の強さに苦戦する雷門。

速水「あああ……。もうダメだあ……。！」

神童「くっ……。！」

ドオン！！

神童がボールを奪われた。

神崎「おおおおおーっ！！！」

神崎が奪い返す。

神崎「天馬！！！」

松風にパスをする。

松風「よしっ!!」

ゴール手前までくると・・・

「ペンギン7号!!」

どどどどっ!!!!

松風「うわあっ!!!!」

優一「京介!・・・なんで試合に出ないの!？」

剣城「・・・・・・・・。」

ただ、顔をそむけるだけだった。

優一「董から全部聞いたし・・・フィフスセクターの人と話をして



るのを見た。」

剣城「！」

董「京介！！」

優一「どうして……！！どうしてサッカーを裏切ったんだ！！？  
？」

私も京介も……優一兄さんが怒ったところを見たのは……

生まれてきて、初めてだったかもしれない……。

優一「お前は……サッカーを裏切ったんだ！！！」

そして、優一兄さんが初めて見せる涙……。

雷門に来て……少なくとも私は変わった。

それは……松風天馬さんと円堂守監督のおかげかもしれない。

一生懸命頑張って……フイフスセクターに逆らって……。

そして……皆が……！！頑張って……！！！！

「本当のサッカー」の楽しさと・・・「仲間」の大切さを教えてくれた・・・。

私にできること・・・それは・・・。

董「・・・京介・・・。試合に行こう・・・!」

前半が終わり、皆が悩んでいた。

松風「・・・みなさん・・・。」

倉間「今度こそダメだ!!」

速水「うわああ・・・。もう勝てないですよ。アルティメットサンダーも完成しないし、10人しかいないしい。」

神童「くっ……。」

皆の心が折れかけた時。

「……試合に……俺を出せ!」

全員「!!」

松風「剣城……?」

董「円堂監督!……弟を……京介を連れてきました。」

ニツと笑う円堂。

音無「良かったわ、これで11人!そしてもしかするとアルティメット……」

神崎「良くないですよ……!!!!剣城はフィフスセクターのシードなんですから!!!!」

神崎くん……。

水鳥「神崎!!」

倉間「そうだ。．．．万能坂では活躍したが．．．あれ以来練習にも来ない．．．。信用できないな．．．。」

剣城「．．．。」

．．．。

董「私も．．．本当に京介を信用したわけじゃない。」

全員（円堂以外）「!?!」

董「信じてるっていったら嘘になる．．．。けど、信用してないっていつても嘘になる。」

松風「．．．、俺は剣城を信じます!」

天馬くん「．．!」

神童「俺も信じます!」

拓人「．．。」

西園「僕も!」

そして．．．全員．．．。

剣城「．．．。」

円堂「皆がそういつてくれると信じていた。・・・ナイスだ董!!」

董「はい!」

神童「(そうか、そう言わせるために・・・しむけるために・・・。こつなることを予想して・・・。董と円堂監督は考えてたんだ。)」

董「じゃあ、優一兄さんが見てることだし!!後半がんばっちゃって!!!」

剣城「ああ、「兄さんのためにな」。」

はいはい、生意気全開、この調子ならやってくれるよね。

後半が始まる。

車田「ダッシュトレイン!!」

車田が奪ったボールをつなげ・・・

アルティメットサンダーを剣城で決めることになった。

神崎「……っ。」

なんで……剣城なんか……っ!!!!

堇先輩は優しいしかわいいし……俺達になんにもしてない。

けど……剣城は……!!

雷門を潰そうとした。

入学式だって……オンゴール決めた時だって……。

練習にさえ来なかった……。

剣城を……誰が信じるんだっ!!!!

剣城が放ったアルティメットサンダーは一直線に行くものの、暴発せず終わる。

剣城「!?!」

神童「・・・なんだ・・・！」

董「・・・。」

心が・・・まだぐらついてる・・・？

松風「剣城！！」

神崎「・・・天馬・・・、わかっただろ？剣城は・・・信頼できないって。」

松風「信じてる・・・。」

え・・・！？

松風「信じてる！！サッカーだって剣城を信じてるよ！！サッカー

を裏切っちゃっだめだよ!!!!」

剣城「……サッカー……!!!!」

董「……ふふっ……」

さすが天馬くん……。

尊敬しちゃうなあ……。

横で円堂がうんうんと顔を上下させていた。

後、円堂監督もね……。



再びアルティメットサンダーに挑戦、そして・・・

剣城「アルティメットサンダーーーーーっ！！！」

ディフェンスを突破した。

皆の顔を晴れた。

神崎「なっ・・・！！」

剣城が・・・アルティメットサンダーを完成させた・・・？

俺も・・・キャプテンも・・・倉間先輩も・・・完成できなかったアルティメットサンダーを・・・？

松風「サッカーも剣城を信じてたんだ！！」

ウソダロ・・・？

ウソダヨナ・・・。

オレ・・・ドウシタラ・・・？

オレット・・・ヒツヨウ・・・？

松風が得点し上々になる。

霧野「ザ・ミスト！」

霧を発生させ、霧野の姿が消える。

そして背後にせまりボールを奪う。

霧野「神童っ！！」

ボールをパスする。

神童「よし・・・。アルティメットサンダーの位置に付け！！」

そしてパスは回され、

剣城「アルティメットサンダーっ！！！！」

再びディフェンスを突破する。

神崎「俺だってなあー！！！！俺だってえええええつ！！！！」

化身を生み出す。

神崎「聖霊フェアリーっ！！！！」

ボールを取り・・・

神崎「化身の力ああっ！！！！俺は・・・勝ちたいっ！！！！」

気が集中する。

神崎「フェアリーアロー！！！！」

ボールはやりのようにつきさす。

「パワースパイク・・・！うわあああっ！！！！」

得点した。

そして再びアルティメットサンダーでディフェンスを崩した・・・。

神崎「おっさきい！！！！」

しかし・・・

ディフェンスが立ちはだかる。

今度は予測して、ディフェンスが崩せなかったのかもしれない。

神崎「くっ・・・そお・・・。」

剣城「パスだ!!」

なんで・・・。

ナンデ・・・。

アンナヤツニパスシナキヤイケナインダ・・・？

「もらったあ!!!!」

松風「パスして聖也!!」

西園「聖也あつ!!!!」

神童「神崎イ!!!!」

神崎「いやだ．．．！！！！フィフスセクターなんか．．．！！！」  
でも．．．パスしなきゃ．．．負ける．．．。

全員「神崎————っ！！！」

皆の意見なんかには惑わされるか．．．！！！！

神崎「俺は．．．俺だああああああっ！！！！！」

剣城「フツ・・・！」

剣城にパスをした。

神崎「俺からのパスだ！！！！失敗は許さないぜ！！！！」

剣城「わかつてる!!」

ゴール手前にくる。

剣城「デスドロップ!!」

新必殺技で決め・・・

雷門は3 - 2で勝利する。

得点したのは全員1年。

それはここ10年初めてだった・・・。

## 神崎の真実

今日の母さんの顔はいつになく真剣だった。

聖也の母「あのね、聖也。」

神崎「ん？」

嫌な予感しかよぎらない。

聖也の母「実は・・・アナタは一人っ子じゃないのよ。」

神崎「・・・は？」

一人っ子じゃない・・・？

聖也の母「アナタには・・・重い病気の姉がいるの・・・。」

## 回想

アナタが生まれてすぐ、お姉ちゃんは病気になったわ。



白血病・・・。

治りはしたけど・・・再発を繰り返しているわ。

「大丈夫・・・だよ・・・っ・あ！」

聖也の母「心配しないで、すぐに治るわ・・・。」

「うっん、治らないよ・・・。」

聖也の母「いいえ！！絶対治るわ！！！」

終了

神崎「・・・そんな・・・。なんで隠してたんだよ！！！」

聖也の母「・・・病気を治すためには・・・莫大なお金が必要で・・・アナタに苦しんでほしくなかったのよ・・・。」

神崎「・・・っ！」

聖也の母「明日、お見舞いに行くわよ。」

神崎「・・・部活終わってからな！決勝戦だから気を抜くわけにいかねえから！」

部活終了し、病院へと向かい・・・

エレベーターで・・・

董「あ、神崎くん！・・・お母さん？」

剣城「・・・・。」

聖也の母「こんにちは、神崎聖也の母です。」

董「私は雷門サッカー部のマネージャーの剣城董です。こっちは弟の京介です。」

神崎「・・・・剣城、董先輩・・・・なんで病院に？」

剣城「・・・・俺の勝手だろ。」

おい・・・、帝国でのアイツはどうした？

同じフロア同じ廊下に行く。

董「どこまで一緒なんでしょう・・・。」

剣城「・・・。」

董「へえ・・・隣なんですね・・・。」

部屋の名前

剣城優一

神崎聖子

剣城・董「（姉いたんだ・・・）」

神崎「（兄いたんだ・・・）」

優一「……あ、来てくれたね……。遅いね……。って当たり前だよ、……。ちゃんと部活してたんだから。」

董「うん、結構京介も頑張ってたよ」

剣城「あの……。兄さん……。」

優一「……。帝国戦頑張ってたね、この調子で頑張ってたね。」

剣城「あ、ああ……。」

……。ほんと、神崎くんのお母さんの前でも態度変えなかったのに・

ブラコンだね、重度の。

すると隣の部屋から聞こえてくる……

聖子「・・・聖也・・・って・・・いうんだ・・・。」

神崎「・・・っ。」

聖也の母「・・・アナタの姉よ。」

髪は抜け落ち、弱弱い。

優一「隣の人ね・・・。白血病なんだ・・・。」

堇「・・・神崎くんのお姉さん・・・。」

優一「弟に自分がいること隠してるんだって。」

・・・そうなんだ・・・。

だからいつもの元気がなかったのね。

部活だって・・・

回想

神童「ぼーっとするな、神崎！！決勝も近いんだぞ！！」

神崎「あ、はい！！すみません！」

剣城「……………」

終了

優一「同じ一年で雷門サッカー部らしいよ。」

董「うん、元気いっぱいいてサッカー大好きなんだよ。」

優一「親近感わいちゃって相談に乗ってるんだ……………」

少し顔が赤い優一兄さん……………」

かわいいかも……………」

董「もしかして、神崎くんのお姉さん好きなんだあ？」

優一「わっ・・・、ち・・・ちがつ・・・やめてよ、董!!」

わわっ焦ってる！

かわいいっ!!

剣城「姉さんも人のこと言えないけどな。」

董「ちよっ・・・!京介っ!!」

剣城「神のタクトの異名を持つ、雷門のキャプテン・・・。」

優一「それって、神童拓人くんだね、へえ・・・好きなんだ・・・!!」

剣城「しかもカップル・・・。」

董「やめえええええええっ!!!!」

声を張り上げてしまった・・・。

すると・・・

ガラッ

聖也の母「すみません・・・今大事な話をしていて・・・。」

優一・董「あ、すみません……。」

パタン……

剣城「怒られた……。すみ・れ・ね・え・さん」

あ……。遊ばれてるううううううっ！！！

ニヤッと笑う、悪戯な顔！！

ドSだな！！！！

すると隣が……

神崎「じゃあ！！俺より姉貴の方が大切なのかよっ！！！！？？？」

かなり物騒な話してる……。。



神崎「俺なんかよりも……。」

聖子「違うよ……。」

すると、優一は車椅子に乗り、隣の部屋に入る。

剣城・董「!!」

優一を追いかける2人。

優一「……聖也くんだけ？」

神崎「……。」

聖子「優一さん……。」

董達も入ってくる。

優一「董達がいったよ、……明るくて、いつも練習頑張ってる

って……。」

神崎「……………」

董「……神崎くん……。」

神崎「幸せそうだな……。お前達……。姉弟は……!!!!」  
そのまま出ていく。

剣城「!?!?……あ!!!!おい、待てよ神崎!!!!」

それを追いかける剣城。

優一「京介!!」

董「神崎くんっ!!」

聖也の母「ごめんなさい……………」

董「い……いえ……。」

聖子「うつ……うつ……。ごめん……。聖也……。」

涙を見せる聖子。

優一「聖子さん……！」

すかさず聖子に近寄った。

董「……優一兄さん……。」

外から悲鳴が聞こえてくる。

ハッと窓を見た。

神崎と剣城は化身を出していた。

董「京介っ……！」

神崎「俺は……誰にも必要とされてないんだああああああっ

「！！！！」

剣城「（ここは病院だ・・・！！化身を暴走させると病院が・・・  
兄さんが・・・っ！！！！）」

化身がぶつかり合う。

聖子「・・・聖也・・・？」

董「・・・くっ・・・、京介えええっ！！！！」

剣城「任せておけ！！！！」

転がってくるサッカーボール。

化身を消し去った。

剣城「デスドロップっ!!!!!!!!!!」

シュートで聖也の化身を消す。

聖也「ハア、ハア、はあ……。。」

剣城「むやみに化身を出すな、一部のシールドが化身の暴走に巻き込まれて命を落としたこともあるからな……。。」

聖子「ごめん……。!ごめんなっ……。聖也あ!!!」  
号泣している聖子。

董「……。聖子さん……。。」

その背中をさすっている優一。

董「……優一兄さん……。」

呼んでも振り向かない……。

優一兄さんから必要とされていないのは……私と京介の方がもしれない……。

革命（かぜ）を起こせ！

円堂「よう、神崎！」

神崎「……おはようございます……。」

いつもの元気がない神崎。

円堂「どうした？」

神崎「ほっておいてください……。」

松風「聖也……どうしたんだろ？」

董「神崎くん……昨日のこと……。」

神童「昨日？どうしたの？」

董「い、いや……色々あって病院に行ってたんだけど……そこに神崎くんのお姉さんがいたらしくて……。」

剣城「……隠し子って奴。」

三国「……隠し子が……。」

董「それで……」

回想

神崎「俺は愛されてないんだ!!」

終了

董「って……。」

松風「……聖也……。」



すると円堂が声をかける。

円堂「鬼道と佐久間からの正体だ、帝国に行く。」

全員「えええええーっ！！！！？？？」」

音無「本当に兄さんに会いに行くんですか!？」

そう、まさに敵に直接会いに行くという。

速水「うわああ、何かされるんですよお!!」

倉間「んなわけない。」

浜野「でもさあ、監督つてよくわからないしさあ……。」

とまあ色々戸惑いの声を上げてる雷門メンバーで……

神崎「うおおおおお！！鬼道様と佐久間様に会えるっ！！！！」

会えるのかっ！！うれしいっ！！

車田「・・・あれでか？」

董「・・・あ、はは・・・。」

単純「・・・（笑）」

円堂「だから夜遅くまでかかるぞ。」

董「じゃあ、優一兄さんの見舞いはあきらめようね。」

剣城「ハア・・・。」

それくらいでため息吐くな。

神崎「やったーっ！！！」

・・・神崎くん・・・。

会いたく・・・ないのかな・・・？

私もなんとなく・・・優一兄さんと神崎くんのお姉さんが仲がいいところを見ると・・・苦しい・・・。

速水「何かされるですよー！」

車田「んなわけねえだろっ！」

速水の心配は

的中・・・

しなかった。

佐久間「こちらだ。」

佐久間が案内する場所。

そこには・・・

久遠「……………」

音無「久遠監督っ!!」

久遠「久しぶりだ、円堂。」

円堂「はい。」

そしてその先に・・・

円堂「……………！響木さん！」

音無「雷門理事長!!」

十年前の懐かしい面々。

話によると、レジスタンス達に鬼道と佐久間は協力していたらしい。

そして、雷門が地区大会のホーリーロードで優勝していき、選挙で  
イシドシュウジを落選させ、響木を新たな聖帝にし、新たなサツカ  
ー界を築く……。

それが目的らしい。

その革命という名のかぜを起こすことができるのは

雷門。

雷門イレブンのみである。

それには地区大会で優勝しなくてはならない。

速水を除けば盛り上がっていた。

董「なんかすごいことになっちゃったね。」

剣城「……………」

おい、無視か。

董「革命だつて！革命！！かつこいいなあ！！」

剣城「いいか、姉さん……！俺達は革命を起こすと同時に罪滅ぼしをしてんだよ！」

董「革命を起こすことが、罪滅ぼしにつながるじゃない！！」

あー、なんかウキウキというか……

正義ってやっぱり気持ちいい。

学校にて……

速水「ハア……。」

董「速水くん、顔色悪いね？具合……良くないの？」

速水「違いますよっ！……昨日のことを聞いて何も思わないんですか！？」

董「え……？」

速水「革命だなんて……無理に決まってるじゃないですかあ！」

董「そ、そんな……。」

ポジティブだなあ……。

速水「そんなこと……ただの中学生ができるわけがないじゃないですかあ！！！」

董「……そんなことないよ、皆で力を合わせれば……。」

速水「失敗したら何かされるんですよ！！！」

董「やる前から失敗から考えないでよ！！！」

速水「何かされてからじゃ遅いんですよ！！！！！」

なんてポジティブ……。

口は京介みたいに達者だな。

倉間「ビビり。」

速水「なんとも言うてくださいつー!」

## 部活動

皆が思い思いの練習をする。

異常なまでのテンションの浜野。

そこへ円堂の携帯が鳴った。

円堂「はい……、はい……!全員がシード!?はい、わかりました。」

全員「!」

音無「全員がシードって……!?!」

へえ……まあ……大変なこと。

車田「じゃあ……全員が化身使い……。」

剣城「それは違うな、シードだからって全員が化身を使えるわけじ



やない。」

董「化身は気の高まり・・・つまり精神とサッカーの上達さを比例してやっとなみ出されるものの。だからサッカーがいくらうまくたって、精神が強くなければ化身を生み出すことはないわ。」

2人の話を聞き、少し安心してる一同。

そして・・・本格的な練習が始まった。

松風「うおおおお!!」

松風の背中な黒いものが渦をまいていた。

剣城・董「（あれは・・・化身!?!）」

放課後

董「・・・神崎くん・・・。」

神崎「俺は・・・絶対・・・・・・・・。」

行かない・・・。

俺はサッカー革命を起こすのに・・・忙しいんだ・・・。

父さんがやっていた熱いサッカーを取り戻すのに・・・。

姉貴は邪魔なんだよ・・・。

## 海王戦！！大量シードの策略！（前書き）

このままだと本当にアニメにおいつくので、オリジナルな合宿回や  
董のプレーを描くものを書いて、時間潰していきたいと思います。  
できたらイナズマジャンパンの誰かを出したい・・・。

## 海王戦！！大量シードの策略！

珍しく、京介が天馬くんの特訓に協力的だった。

やっぱり、あれは化身だったのかも・・・。

董「そろそろお昼よ」

車田「あ、そういえば、お昼持ってきてなかったなあ。」

神童「董・・・。」

董「大丈夫ですよ！12人＋6人分作ってきましたから・・・料理が得意なんで拓人の家の材料で作ってきました。」

速水「なるほど、だから練習に来てなかったんですね・・・。」

円堂「本当か!？」

董「でも・・・円堂監督・・・弁当持ってきてますよね・・・。」

円堂「あ、いや・・・これは・・・あははは。」

松風「（まさか、夏未さんに作ってもらってるんじゃない?）」

音無「（そうなのよ・・・。）」「

1人ずつ弁当を配る。

剣城「ま、糞まずいけどな。」

神童「おい、剣城!！」

神崎「食う前から言っな!」

皆が弁当を開ける。

速水「おおっ!おいしそうです!！」

浜野「おおっ魚が入ってんじゃん!!」

倉間「彩はいいが・・・後は味だな。」

霧野「食べてもいいか? 董。」

董「いいよ。」

全員「いただきまーす!」

松風「うわーっ!! ずっとごくおいしいですっ!! 秋姉と同じくらい・・・いやそれ以上に!!」

西園「おかわりしたいくらい!!」

神崎「剣城イー、お前はこんなおいしいもの毎日食べられるのか、幸せだな。」

剣城「・・・フン・・・。」

神童「おいしいよ、董。」

霧野「うわぁ！こんなおいしい弁当はじめてなくらい。」

速水「毎日こんなおいしい弁当食べたいです。」

倉間「思い以上にうまいな、これ。」

浜野「ううーん！！季節のさんま&卵焼きつまーいー！！！！」

車田「これはいい神童の嫁だな。」

天城「これで元気が出るド！！！！」

三国「これを見習いたいくらいたせな。」

水鳥「すっげえうまいじゃん！！」

茜「フッフ、どうしたらこんなに料理がうまくなるの？」

葵「とってもおいしいです、董先輩！！」

音無「ほんととってもおいしいわね、あたしなんかよりも・・・。」

円堂「もぐもぐもぐもぐもぐ！！！！うまい、うまいぞ！！董っ！！！！」

堇「皆ほめすぎですよ……。」

円堂「さてと、海王戦に向けて！練習だ！！」

放課後

速水「無理ですよ……。無理なんです……。」

堇「速水くん。」

速水「堇さん……。」

堇「大丈夫！勝てるって！！」

速水「……。」



海王戦当日・・・。

バスの前

一乃「あ・・・あの!!」

そこには一乃七助と青山俊介がいた。

神童「一乃、青山・・・。」

円堂「？」

音無「元サッカー部です。」

青山「あ、あの・・・一緒につれていってくれませんか!!??」

全員「!!」

車田「退部したのに！何をいまさら・・・!!」

倉間「練習もなしに試合につれていけるわけねえだろ。」

と乗り気じゃない皆。

神童「わかった。」

霧野「神童!!」

神童「革命<sup>かせ</sup>を起こすには、少人数ダメだからな・・・。」

董「拓人・・・。」

拓人「・・・優しいのね。」

遂に海王戦が開幕。

負けは許されない。

一乃と青山はベンチ。

キックオフは神崎。

神崎「よし・・・。」

ゴールに向かって突き進む。

「進ませないぞ!!」

神崎「くっ・・・。」

剣城「こっちだ!!」

神崎「ああ!!」

ボールを高くあげ蹴った。

剣城にパスが回った。

だが・・・

「行かせるか!!」

スライディングを決める。

そのままこっちのゴールへと向かう。

神童「天馬！！やらせないぞ！！」

松風「はい！！」

しかし、相手は高くジャンプしてかわした。

董「さすがシード……。一筋縄でいかないわね……。」

そしてゴールまで到達。

そのまま点が入った。

三国「くうっ……。！！」

再びキックオフ。

剣城と神崎のパス回しでゴール手前まで来た。

神崎「倉間先輩！！お願いしますっ！！」

倉間「ああ！！」

倉間先輩ならいけるっ！！

倉間「サイドワインダー！！！！」

必殺技を使う倉間。

しかしあっけなく止められ、

そのまま形成逆転・・・

2点、3点と・・・じょじょに奪われていく。

羽ばたけ！天馬の化身！

前半の終わりに剣城がデスドロップで決め一点は取れた。

前半終了し、円堂から告げられたのは・・・

G Kを松風にする。

円堂の考えがわからないメンバーだったが・・・。

松風天馬に期待をし、

後半が始まった。

神崎「天馬のところまでボールは行かせないぜっ!!」

神童「神崎!」

神のタクトで導いた。

神崎「化身をつか・・・っ!!」

DFが邪魔をする。

神崎「チッ・・・。剣城・・・!」

振り返りパスを試みるも・・・

神童と剣城はマークされていた。

董「まんまと化身使いはマークされてたわね。」

D Fは止められず、おのずとG Kまで来た。

神崎・西園「天馬っ!!!」

松風「（俺に・・・本当に・・・止められるのか・・・？）」



剣城「松風!!」

松風「・・・剣城・・・？」

剣城「サッカーを取り戻すんじゃなかったのか!!??」

剣城に声援が響いた。

松風「・・・よし!!うおおおおおーーーーっ!!!!」

ボールを蹴り返そうとする。

そこに背中に黒い渦が舞う。

円堂「・・・天馬はMFだから、真正面からボールを蹴ったことがなかった。」

董「じゃあ・・・!!」

円堂「真正面からボールを受けるところで化身を生み出せる。」

松風「うおおおおおーーーーっ!!!!魔神pegasus!!!!」

遂に化身が現れボールを蹴り返した。

神崎「やったじゃねえかあ!!!!」

ボールが回ってきた。

神崎「スマツシュファイヤー！！！！！」

ボールが炎を身にまとい、回転しながらゴールに突き刺した。

そして・・・

剣城「デスドロップ！！！」

同点に追いついた。

ボールが速水のところに転がってくる……。

速水「（化身が……。最初は無理だと思っていました……。けど……。俺はただ、決めつけていた……。）」

速水「できるかできないか、やってみなきゃわからない!!!」

速水「ゼロヨン!!!」

F MとM Fを抜け、松風にパスをした。

董「速水くんっ!!!」

やった、決めてくれた!!!

松風がDFを抜けようとする。

松風「うおおおおおっ！！！！魔神pegasus！！！！」

DFを抜け、神童にパスした。

神童「フォルテシモ！！！！」

遂に追い抜き・・・

雷門が勝利した。

神崎・西園「やったああ!!!!天馬あ————っ!!!!!!」

松風「あはは、やったんだ・・・!!」

## 過去と重なる思い、そして合宿

### 神崎の家

聖也の母「どこで遊んでたの？火曜日はお姉ちゃんのところに行く約束よ。」

神崎「うるせーなあ……。今日は練習が長引いたんだよ。」

聖也の母「私が行った頃には京介くんと董ちゃん制服のままて病院来てたわよ。」

アイツら直行かよ！？ええ！？

神崎「あいつら……。早くに帰ってさ……。」

聖也の母「董ちゃんが今日は早く終わったって言ってたわよ。」

だあああああ！！！！董先輩真面目ですね、ほんと。

聖也の母「早く行きなさい、じゃないとサッカーさせないわよ！」

神崎「サッカーさせないって……。皆の迷惑になるじゃねえかよっ

「！！！」

聖也の母「なら早く行きなさい。」

めんどくせえ……。

あんな奴に……会いたくないんだよ……。

董「それで、来週、合宿なの！！楽しい」

優「良かった。」

董「え？」

優「昔から人見知りが激しいから友達がほとんどいなかったけど、雷門に来て、董……明るくなったような気がする。」

剣城「彼氏もできたしな。」

ニヤリと笑った。



董「う、うるさいっ！ー！」

コンコンとノックの音がする。

聖子「・・・優一さん・・・あ、董ちゃんと京介くんもいたのね。」

剣城・董「・・・こんばんは・・・。。。」

聖子「・・・試合・・・見たわよ。」

董「あ、ありがとうございます。」

聖子「京介くん、かつこよかったわ。」

剣城「・・・。」

あれ・・・なんか視線感じる・・・。

そこには・・・神崎くんがいた・・・。

董「神崎くんっ!!」

聖子「聖也!？」

逃げ出そうとする神崎。

董「神崎くん!!」

神崎の腕をつかんだ。

神崎「・・・っ!」

思ったより董先輩の力強いな・・・。

さすがシードって・・・ところか。

無理矢理に神崎が病室に連れた。

神崎「董先輩・・・。」

董「いいのかなあ、円堂監督にこのこと話すよ?」

神崎「っ・・・。わかりましたよ・・・。」

聖也「あ、あのね、聖也・・・。」

神崎「なれなれしく聖也って呼ぶな!!」

董「姉弟なのに・・・。だったらどう呼ぶの？」

神崎「姉弟なんかじゃない!!」

うわぁ、・・・FMって生意気多いな・・・。

董「聖子さん、弟なんかに負けちゃダメですよ。弟なんて生意気でバカで厨二病で・・・

ガンッ

いった!?

足蹴られた・・・。

京介に・・・。

董「なあにFMの蹴りを女に入れるんじゃない!!!!」

蹴り返した

剣城「っ!!!!てめー足痛めたらどーすんだよ。選手だぞ!!!!」

董「アンタが蹴ったからいけないのよ!!!!」

剣城「てめーがいけねえんだよ!!!!」

董「私に何も京介のことなんかいつてない！！！」

剣城「んだと・・・テメエ・・・。」

董「姉に向かってテメエって何よ？」

剣城「目の前にいる超ウザったい女のことだっ！！！」

董「名前は！！؟؟？」

剣城「剣城董！！！」

董「さつき悪口いったのは目の前にいる最低な男剣城京介！！！」

剣城「なん・・・」

優一「やめなよ！2人ともっ！！！」

あ・・・。

京介のせいだあああああっ！！！！！！

董「まあ、こんな感じでいいですよ、聖子さん。」

聖子「あ・・・あはは・・・。」

はい、私が悪かったよ。

元は京介だけど。

神崎「……………」

董「姉弟なんて必ずしも仲がいいってわけじゃないんだよ。」

神崎「兄弟と兄妹はいいのに？」

剣城・董・優一「……………」

ほら、答えない。

本当は董先輩と剣城って仲がいいんだよ…………。

くそ…………。

神崎「帰るっ！！！」

董「…………神崎くんっ！！！」

聖子「待つて！！！」

聖子が追いかける。

階段を走る神崎。

それを追いかける聖子。

神崎「追いかけてくんないよ．．．わあ!？」

足を滑らせた。

聖子「聖也っ!？」

ドンッ!!!

ぶつかった。

聖子「あ．．．あ．．．きゃあああああっ!!!!!!!!!!」

神崎「．．．姉貴．．．?」

全てが．．．スローモーションだった．．．。

ドンドンドンッ!!!

姉貴が．．．転げ落ちていく．．．。

スローだったからわかった．．．。

俺を上突き飛ばして．．．

庇ってた．．．。

声に駆け付けた三人。

董「っ……！聖子さんっ！？」

剣城「……っ！」

優「誰か……、先生……先生を呼んで……！！は、早く！！！」

董「あ……うん！！！」

状況を聞けば・・・

神崎くんが足を滑らしたのを庇ってそのまま・・・。

そうか・・・あの日・・・なんだ・・・。

同じなんだ・・・。

聖子さんは集中治療室に運ばれ・・・

危ない状態。

神崎「俺は・・・。」

さすがに・・・気落ちしてるのかな・・・。

神崎「悪くない・・・。」

剣城「なんだと・・・？」

酷い・・・！！

神崎「・・・助けてなんて言っていないし・・・助けて方が悪いんだ  
！！！！」



乾いた音が廊下に響いた。

私は・・・

神崎くんの頬を叩いてた・・・。

神崎「っ・・・!!」

董「・・・助けてなんて誰も言わないよ・・・。  
・・・自分のため

に犠牲が出るくらいなら。」

だけど・・・

董「罪意識にさいなまれるのが普通じゃないの！！？？私達間違ってる！！？？？」

あ・・・どうしたんだ・・・董先輩・・・。

董「助けてもらったのにその人を責めるなんて・・・サッカーでの失敗を責めてるのと同じよ！！！」

神崎「う・・・。」

董「謝つてよ！！！！！」

また響く・・・董の声。

優一「（京介が帝国戦で運命の決着をつけたのなら・・・董の運命の決着は・・・きっとこれなんだね・・・。見せてもらったよ・・・。董の本心・・・。京介のこと・・・十分に任せられるよ・・・。）」

次の日、聖子の意識はいまだに戻らなかった。

サッカー塔

董「えっと・・・明後日の合宿に向けての予定表よ。」

マネージャーが配っていく。

予定

一日目

七時集合

七時半出発

バスで五時間かけて合宿

車内で昼御飯

一時から広いグラウンドで練習。

六時は晩御飯

七時は風呂

八時明日の予定確認

その後寝るまで自由時間

速水「（何も作者の合宿予定みたいになくても・・・）」

二日目

六時起床・集まり

七時朝御飯

七時半山登りに出発・弁当配布

十二時休憩・弁当

三時から同じように。

三日目

六時起床・集まり

七時地元の中学との練習試合・三校ほど戦う。

十二時休憩・昼御飯

一時から練習

六時以降は同じ。

四日目

六時起床・集まり・朝御飯

七時から海に出発

ビーチサッカーをする。

その他色々

その後は同じ

五日目

同じ

七時から練習

六時まで御飯をはさみ同じ

六日目

同じ

七時から練習試合

六時まで同じ日程

七日目

七時から六時まで休憩はさんで練習

八日目

七時から練習

一時に雷門に向けて出発

速水「最後らへんいい加減ですね．．．。」

浜野「海って釣りできるーっ！！！！！！！」

倉間「なんか微妙だな．．．。」



合宿、バスの中!!!

優一「聖子さんの意識、回復したよ。怪我もただの打ち身で・・・頭をぶつけた後遺症もないってさ。」

董「良かったあ・・・。」

優一「あれ？京介は？」

董「合宿の調整、一年生は初めてだから、結構時間かかっているの。」

優一「合宿か・・・。頑張ってるね。」

董「うん。」

わくわくしてきた。

松風「合宿といえば・・・

神崎「青春!!」

松風「合宿といえば・・・

西園「バスの中!」

あれ・・・最期・・・変じゃない?

松風「バスの中といえば・・・

松風・西園・神崎「座席表————っ!!!!」

こうなつた。

円堂・音無　茜・葵

速水・浜野　堇・水鳥

神童・霧野　車田・天城

剣城・松風 三国・倉間

西園・神崎 一乃・青山

円堂「よし、皆！覚えたか？」

音無「絶対に違う場所に座っちゃダメよ。」

合宿一日目

車内

わいわいわいわい

速水「ハア……。長くバス乗るんですかあ……。」

浜野「ちょー楽しみ！合宿う！！」

霧野「音無先生、俺と董を交換してあげてください。」

へえ……。？

音無「どうして？」

霧野「あと四年後に結……。」

董「うああああ！！」

霧野の声がかき消された。

音無「なら、いいわよ」

董「先生！！」

剣城「頑張れよ、ね・え・さ・ん（ニヤリ）」

董「うつさいわ!」

こんな感じでバスの中が始まった。

円堂「バスは暇だろ?なら二組の席でマイクを回す・・・それで一発芸だ!!」

速水「一発芸ですか・・・。」

円堂「まずは空野達から。」

葵「はい、えっと・・・何しますか?」

茜「そうねえ・・・。シン様早撮り。」

カシャカシャカシャ

茜「三十枚できたあゝ」

葵「は・・・ははは・・・あはは・・・。霧野さん、水鳥さんお願いします。」

水鳥「どうする?霧野。」

霧野「そうだなあ・・・。」

水鳥「・・・そうだった・・・女装しろっ！女装！！スカートはけ！！」

霧野「うわああ、やめあ・・・」

この後蘭丸くんのやめアアアアッ

という運転の手元が狂うような叫びはおいといて・・・

蘭丸くんの姿は・・・

蘭丸くんは顔を真っ赤に染めて余計女の子らしくなった。

私よりかわいい・・・。

霧野「うああ!!も・・・もついいだろ!？」

茜「レアレアレア」 高速撮り

全員「似合ってるう」

霧野「うわあああ!!罰ゲームじゃないんだからよお!!」

霧野「天城さんお願いしますう・・・。」

天城「元気だすド!!かわいかったド!!」

霧野「やめてくださいっ!!」

車田「どうする?天城・・・。一発芸なんて・・・。」

天城「お前にはあるド!!列車という必殺技が!!!!」

車田「は？」

天城「あとは任せたド！！前世は列車！！」

車田「シュポオ！！シュポシュポオ！！！」

マイクからも蒸気が噴き出す。

遂に笑いの的になった。

そして順に流れていき、松風と剣城に回った。



松風「遂に来た……。どうしよう……。剣……。あっ！……！」

剣城「ZZZ」

熟睡中だった。

松風「ああ！！剣城！！起きてよーっ！！」

董「甘いわよ、天馬くん。……。京介つてば……。合宿行く気全然なかったんだよ。」

松風「そうなの？」

董「だってえ……。びよう……」

剣城「その先言ったら殺す！！！」

董「ね、起きたでしょ。」

松風「あはは……。ねえ剣城……」

剣城「なんだ。」

めんどくさそうに言った。

松風「一発芸。」

剣城「お前がなんとかしろよ。」

松風「ええええつ。」

円堂「サッカーも協力！同じさ、剣城！！」

剣城「ハア……。」

松風「やるーよ、剣城ーっ！」

剣城「……うるせえ……。」

松風「やろうつて！！」

剣城「だからやらないって言うてんだよ！！！！」

松風「あはは、ムキになったあ」

董「あはは、あははははっ！！！！」

全員「はははは！！！！」

剣城「覚えてろよ……。次、姉さんたち！！！！」

マイクを投げた。

私の頭に激突。

董「あいた！！！！京介エエッ！！！！」

神童「董……。剣城、姉だからってなんでもやっていいわけじゃないんだぞ！！」

剣城「はいはい、バカップルさん達。」

神童「なっ……。」

ちよつと……。拓人なんでそんな顔赤いわけえええ！？

董の必殺技披露！

バスは合宿場に到着、練習もし、晩御飯の時間になった。

円堂「今日の晩御飯はお好み焼きだ。」

速水「なんでお好み焼き……。」

倉間「形がよれよれのものじゃないとしたもの……。なんだこれ。」

浜野「ちゅーか、これはうまそうじゃん。」

神崎「なんでもいいから早く食いて……。」

松風「俺もお腹すきました。」

円堂「だれが作ったかわかるか？」

五人「無視!？」

董「誰って……宿の人じゃないんですか？」

円堂「それはだな・・・。」

浦辺「ウチが作ったんや。」

財前「あたしが作ったんだ！」

音無「!!」

円堂「俺が呼んだんだ。」

浦辺「ウチは浦辺リカや！」

財前「あたしは財前塔子だ、よろしくな。」

円堂「エイリア学園が襲ってきた時、イナズマキャラバンとして参加してくれたんだ。」

浦辺「ウチが作った・・・」

財前「あたしが作った……」

浦辺・財前「お好み焼きを召し上げろーっ！！！！」

董「ふわあ！！おいしーい！！作り方教えてもらいたい。」

浦辺「それがウチが作ったんや！！」

董「教えてください」

浦辺「いいで……。せや、ちよつと必殺技を見せてみい。」

堇「え……？」

なんで私が必殺技を使えることを知ってるの？

浦辺「女やつて強くなきゃ、アカンからな。」

董「いいですよ。」

財前「それより、あしたのも食べてみる！うまいぞーっ！」

えっ  
・  
・  
・  
あ  
・  
・  
・  
!!  
!!  
!!

董「は、はい・・・。」

董「おいしいっ!!」

リカさんの方がおいしいけど・・・

財前「だろ、だろ？」

浦辺「さあ、必殺技を見せてみい。」

財前「ダメだな。まずはあたしが見せるんだ。」

なんかものすごい方向に向かっている・・・。

財前「練習場に行くぞ。」

ええええっ!?

董「まだ食べてませーん。」

財前「大丈夫!心配すんな!」

OP使われても・・・。

円堂「相変わらずだな。」（汗）

ここからはリカ・塔子と表示します。

塔子「ザ・タワー！！！！・・・どうだっ！」

地面からタワーが現れた。

董「かつこいいです！財前さん！」

塔子「塔子・・・でいいよ。」



リカ「ウチはリカでいいで！」

董「塔子さん・・・リカさん・・・。」

リカ「さあ、次は董の番やで、皆見とる！！」

全員「ジーっ。」

うわあああつ 拓人も監督も・・・音無先生も・・・先輩もつ！！！！  
てか京介、私の必殺技知ってるでしょ・・・。

松風「がんばってくださいーい。」

神崎「董先輩の必殺技見てみたいでーす！！！」

水鳥「頑張れーっ。」

うう・・・あんまり期待しないでよ。

剣城「監督、姉さんはシュート技とブロック技の二つあります。のため、シュート技を誰に打たせてもらってください。」

円堂「じゃあ・・・」

松風「俺がやりたいです！」

神崎「俺が・・・!!」

倉間「でしゃばるな、一年。俺がやる。」

無理に倉間となり、準備する。

倉間「サイドワインダー!!!!」

必殺技が向かってくる。

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

オーロラがボールを止めた。

コロコロと力なく転がるボール。

倉間「くっ・・・!!」

円堂「すごいな、董！」

董「シードですから．．．。」

松風「俺もやりたいっ！！！マッハウインド！！！！」

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

マッハウインドも弾き返され、力なく転がっていく。

松風「あーあ．．．。」

塔子「すごいな！かっこいい！！」

そんなに褒められると．．．。

神崎「俺も．．．。行きます！！スマッシュファイヤー！！！！」

炎を身にまとい猛スピードで迫ってくる。

董「ブロック・ザ・オーロラ！」

再び止めた。

神崎「嘘だろ．．．。」

円堂「董．．．。やるな。今度はシュート技か．．．。三国、董とPKだ。」

董「遠慮なくいきますよ。」

三国「ああ!」

董「行きますよ!オーロラフェニックス!!!」

オーロラが不死鳥の姿に変わり迫ってくる。

三国「バーニングキャッチ・・・うわあああ!!!」

三国き吹き飛ばされた。

車田「俺達より強いかな・・・。」

天城「男だけど負けたド・・・。」

塔子「チツ、チツ、チツ・・・。女だからってナメるなんてことはダメなんだ!」

田堂「そうだな、ホーリーロードも・・・女が出場できたらな・・・。」



## 肝試しで大騒ぎ

次の日は山登り・・・

夕食も終わり、昨日より余裕があった。

浜野「そうだ、皆で肝試ししない？」

車田「おお、賛成!!」

松風「大賛成です!!」

神崎「肝試しか・・・。俺全然怖くないぜ。」

速水「ええー!?き、肝試しですかあ・・・?俺、遠慮しておきます・・・。」

倉間「いいのか?皆行くんだぜ?」

浜野「1人、部屋にいるのか・・・?そんなことしたら・・・こわい・・・こわーい幽霊がああああああつ!!!!!!」

速水「うわあああああつ!!!!行きますっ!!!!行きますよう!!!!」

ふふ、速水くんかわいい・・・。

2人組で行くことになり、バスのペアとなった。

神童「董……。」

董「よろしくね、拓人……。」

神童「ああ……。」

松風「怖いよ、剣城ーっ！」

剣城「あーもう！べたつくなー！」

ヒュードロボロボロ

松風「ぎゃわああああっ！……！」

剣城を置いて逃げる松風。

剣城「全くよお……。肝試しなんかくだらねえ……。しかもこ  
れただのこんにやくと人形じゃねえかよ……………」

飽きれつつも暗い道を1人で歩く。

かなり険しくなった。

剣城「…………この道かよ……………」

不安といっても道に迷った不安だった。

剣城「松風目…………。あいつのせいで迷子かよ……。松風と同じ  
道を歩いてるはずなんだけどな……………」

よくわからない木々。

剣城「一度戻るか…………？」

剣城「…………おんなじ場所に戻ってねーか。」

剣城「…………迷子かよ……………」



一方、堇・神童ペアは・・・

ヒュードロドロ

堇「きゃっ!!」

思わず神童の腕をつかむ。

神童「う・・・うあ・・・す・・・、すみ・・・れ・・・!!!!」

顔を真っ赤にしている神童をよそに

堇「きゃあああ!・・・あ・・・。」

うあ・・・あ、わ・・・わわわっ・・・私っ・・・!?!?

堇「ごめんっ！！」

腕を放そうとするが・・・

神童「このままでいいよ・・・。」

堇「っ・・・！！！」

神童「堇・・・。」

や、恥ずかしいっ・・・。無理、この状況保の・・・。

堇「ごめんっ・・・！！無理っ！」

神童「い、いや、無理させごめん・・・。」

なんだろ・・・このギクシャク・・・。

浜野・速水ペア

速水「今にも何かが出てきそうですねえー！」

浜野の後ろに隠れ、目をつむりながら震えている。

浜野「大丈夫だつて！お化けなんて嘘さ、お化けなんてないさ 寝  
ぼけた人が見間違いたのさ」

速水「浜野くん、その歌の続き知ってるんですか？」

浜野「冷蔵庫に入れて、力チ力チに・・・」

速水「違いますよ！その歌の続き……。だけどちよつとだけどちよつと怖いな……。って……。」

浜野「あーあ、せっかく気分を明るく……」

マルチプラットフォーム

2人「うわあああああつーーー！！！！」

速水を置いて疾風ダツシュする浜野。

速水「ぎゃああああああつ！！！ずるいですよつ！！！！浜野く……………ん！！！」

一通り終わり・・・

円堂「天馬、剣城は？」

松風「・・・俺が置いてきちゃって・・・。」

音無「ダメじゃない。」

松風「ごめんなさい・・・。」

仕方ないな・・・。

董「私、天馬くんと探します。弟のことだし・・・。」

音無「本当？助かるわ。」

松風「剣城ー！」

董「京介ーっ！！」

呼んでも応答がない。

・・・合図・・・。

合図を送れば・・・。

・・・そうだ。

董「はああああー！！いでよ！化身！！勇者アウトレス！！！」

松風「っ・・・。これが董先輩の化身っ・・・！！！」

剣城「あれは・・・姉さんの・・・。・・・剣聖ランスロット  
！！」

董「いた、あそこね、もう一度合図よ。天馬くん。」

松風「はい、はああああ！！魔神ペガサス！！」

その後合流、二日目終了。

三日目、一日付の練習・・・そして・・・

三日目・・・。

速水「海って・・・ビーチサッカーって・・・。」

円堂「お前達に紹介したい相手がいるぞ。」



## 本当のサッカー

綱海「よ、海のことなら俺に任せな」

神崎「あ、あなたはああああああっ！！！！」

疾風ダッシュで走り綱海の手を握る。

神崎「イ、イナズマジャパンのおおお！！！！」

綱海「・・・は・・・？」

円堂「いや、あの・・・おい、神崎！」

神崎「わつと・・・。俺は神崎聖也つています。」

・ 綱海「・・・あはは・・・。まあ、よろしく。こんなこと海の・・・

円堂「というわけで！！海で体を鍛えるぞ！！！！」

綱海「無視かよ。」

董「……………」

なんかおもしろい人……。

円堂「皆！水着に着替えたな！」

綱海「さあ！バタ足だ！！水に抵抗しキック力と足を早くし、体力も作れる……。サッカーの練習に最適だ！！」

綱海は海に飛び込み……

綱海「バタ足……っ！！！」

全員、茫然。

円堂「バタ足だああ……！！」

バシャバシャバシャ

聖也「っ……!!バタ足だっ!!」

バシャバシャバシャ

円堂と綱海につられてやる聖也。

天馬・信助「バタ足……っ!!!!」

速水「……こんなでサッカーの練習になるんでしょうか……。」

倉間「さあな。」

速水「さあなって……。断言してくださいよ、無駄って……。」

浜野「おもしろいそうじゃん」

速水「浜野くん……。おもしろそうって……。」

車田「何事もやってみることだな。」

天城「やるド!!海なんて久しぶりだド!!」

三国「ああ!!」

速水「えええ……!!?」

剣城とマネージャー以外の一年は全員やっている。

浜野と三年も……。

倉間「速水……。お前、やんないのか？俺はやんないけどさ……。」

速水「ですよねぇ……。俺もやりませんよ。」

一乃「……。青山……。」

青山「霧野と神童もやってないんだし……。いいよね……。」

董「海！海」

剣城「ガキみてえだな、水着似合わなっ！！」

董「うるさーいっ！！！アンタの方が100倍似合わない。」

剣城「んだと！！؟؟？」

霧野「どうする？神童。」

神童「……どうしようかな……。。」

車田「2年――結構楽しいぞ！」

倉間「先輩が言うなら仕方ない。」

速水「え……。ええ！？あ……。俺もっ！」

霧野「……。仕方ないよな、神童。」

神童「ああ……。。」

一乃「……どうする？ やってないの俺達だけだ……。」

青山「……先輩も言ってるし、仕方ないか。」

水鳥「そんなに嫌がるもんじゃねえだろ。」

葵「あはは。」

茜「シン様の水着姿……。素敵。」

円堂「よし!!ビーチサッカーやろっぜ!!」

全員「ビーチサッカー!!??」

ビーチサッカーって・・・。

円堂「グラウンドより動きが鈍くなるから体力使うぞ!!」

浜野「一乃!」

一乃「あっ・・・。」

砂に足が埋まった。

一乃「う・・・うぁ!!」

そのままこける一乃。

董「一乃くん、大丈夫!？」

一乃「うん……。結構大変だな……。」

天馬「あつつい!!あつつつ。」

聖也「ここはマジあちっ!!!!」

信助「でもボールが!!」

綱海「走れ!!走れば大丈夫だあ!」

皆がわいわいとしている中……

円堂「……皆楽しそうだな。」

音無「円堂さん、どうして綱海さんと……?」

円堂「……最近、革命だとかフィフスセクターで楽しくサッカーやってなかったからな。」

音無「……………」

円堂「思い出してほしかったんだよ、「本当のサッカー」を。」



音無「10年前のイナズマジャパンのFFI優勝・・・いえ、雷門イレブンのFFの優勝のころのサッカーは・・・こんな感じでしたよね。」

円堂「みんな、つらいことを忘れて楽しくサッカーに打ち込んでほしかった。10年前のような大騒ぎみたいな・・・でもエイリアはごめんだ。」

音無「あはは・・・。・・・10年前は兄さんのことでいっぱいだった・・・。変わってしまった兄さんのことで・・・。でも・・・サッカーで兄さんは・・・変わってたんじゃないって気づけた。」

円堂「・・・取り戻さなきゃな・・・。」「本当のサッカー」を。」

ナチュラル参上！

速水「そういえば、試合って・・・誰と対戦するんですか？」

神崎「まさかイナズマジャパンとか!？」

倉間「お前、世界をなめてるだろ。」

神崎「フィディオさんとロココさんはかっこいいぞ!！」

倉間「（アホだな・・・。こいつ・・・。）」

円堂「さあ、対戦相手だ!」

神童「え・・・。」

そこに立っているのは・・・

董「雷門イレブン・・・。対戦相手は私の私軍・・・ナチュラル。」

松風「私軍って・・・。ということは・・・!?!」

剣城「奴等全員・・・シードだ!?!」

松風・西園「ええええー!?!」

「僕は、董キャプテンを追って、シードやめたんです。」

「私も。」

「よろしくな、雷門イレブンさん。」

皆ポカーンとしている。

剣城「・・・信じていいのか?シードは勝つためならラフプレーを問わない奴等だ。」

董「私は美しく、そしてかしこいチームよ。ラフプレーを使うシードは弱さを隠すため!本当に強いシードはラフプレーなんか使わない。・・・そして皆かしこい。目的を失った彼らはシードである必要はない。」

神童「・・・目的って?」

董「彼らの目的はサッカーを変えること。」

そこへ円堂が現れた。

円堂「イナズマジャパンの試合に感動した彼らは、人の価値を決めるサッカーをよく思っていなかった。」

董「それで、平等な試合をするフイフスセクターに従った。けど、彼らの本当の目的は円堂監督の時と同じように・・・人の価値が決まらない、そして試合設定を問わないサッカー。」

霧野「つまり、俺達と同じようにサッカーに革命を起こそうとしているのか。」

神童「実力は？海王戦の二の舞じゃないだろうな。」

剣城「いや、奴等は黒の騎士団よりはるかに強い。」

董「・・・さあ、試合の始まりだっ！！！！」

神童「・・・董、キャラ変わってない？」

剣城「フィールドに立つとああなるんだ。」

神童「そういえば、シードとしての董の目的って？」

董「それは・・・」

剣城「言ったら潰すッ！！！」

董「はいはい。」

試合が始まった。

神童「董のポジションはFMか。」

キックオフ。

剣城「行くぞ。」

神崎「ああ。」

パスをつなげていく。

董「・・・遅い・・・。」

剣城と神崎が董を抜いた。

神崎「！？ボールが・・・。」

いつの間にか董がボールを持っていた。

神童「来るぞ！！董を止めるんだ！！」

松風「はい！」

董「・・・・・・。」

しかしあっという間に切り抜けた。

神童「早い・・・！！」

霧野「おおおおお！！」

スライディングしてくる。

しかしジャンプでかわす。

霧野「董ってこんなに強かったのか!!」

もうゴール前。

董「オーロラフェニックス!!!」

七色のフェニックスがゴールに迫る。

三国「フェンス・オブ・ガイア!!!!」

しかし守りを崩し、得点した。

茫然とする雷門イレブン。

速水「ああ……。なんかあつという間の得点……。」

倉間「早すぎる……。」

再びキックオフ。

剣城「今度こそ……!」

倉間と剣城、そして神崎が四方八方のパスで惑わしつつゴールに近づいていく。

「アイスグラウンド!!!!」

神崎「えあ！？吹雪様の技！！！？」

地面が氷つつ倉間の動きを止める。

そのままボールを奪われ、再び董が・・・

剣城「させるかああああ！！！！剣聖ランスロット！！！！」

化身をだし、突っ込んでくる。

董「きゃあっ！？っ・・・。現れよ！！勇者アウトレス！！！！」

神童「姉弟の化身対決！！！？」

剣城「うおおおおっ！！！！」

董「はあああああっ！！！！」

ボールが空高く飛んだ。



董「しまった!!??」

西園「うおおおお!!ぶつとびジャンプ!!!!」

必殺技がゴールに迫る。

「はあああ!!ゴットハンド!!!!」

円堂「……(ニコッ)」

神崎「円堂監督の技なんて反則だーっ!!!!」

止められた。

それから……

10-0でナチュラルが勝利した。

神童「・・・惨敗・・・。」

皆相当なショックを受けている。

董「だってさっきアイスグラウンドを使った雪佐田は吹雪さんの親戚だもん。」

神崎「は？」

董「ゴッドハンドを使ったのも円堂監督の親戚だもん。」

全員「ええええええええーっ！！！」

剣城「聞いてねエ！！！」

董「じ・つ・は 優一兄さんも知って・・・」

剣城「てめえええええええっ！！！」

董「きゃー、拓人ー京介に襲われるー！」

神童「あははは。」

なんだかんだで楽しい合宿だった。

## 狩屋マサキ

合宿後の練習の再開後、

雷門イレブンのコーチとなった鬼道有人。

そして

松風「転校生の狩屋マサキって言うんだ！」

円堂「狩屋！サッカー・・・好きか？」

狩屋「ええ？は、はい！（でなきゃ入部しねーだろ！）」

董「・・・。」

そんなわけで練習でもDFとしてすごい実力を見せてくれた。

狩屋「ハンターズネット!!」

神崎「スゲーッな!狩屋!」

狩屋「あ、あはは・・・それほどでも・・・。」

私と京介はFMだからな・・・。

そのまま練習が続いて

天馬さんと狩屋くんがぶつかって・・・

松風「あたた・・・。」

神童「すごいじゃないか、狩屋!」

狩屋「そんなことは・・・。(ちよろいもんだぜ!)」

照れてる!素直でいいなあ!

董「それにくらべて！京・・・」

剣城「それにくらべて姉さんは攻め攻めだもんな！」

董「なっ・・・！？なあんですつてえ！！！」

霧野「狩屋、今のプレー・・・強引だっだぞ！」

「狩屋「・・・チッ（なんなんだよ！俺に突っ掛かってくんないよ！！）」

秋空チャレンジャーズ・・・。

田堂監督が木暮さんから引き受けたらしい。

だからといって・・・

対戦相手が木暮さんって・・・

董「春奈さん、彼はイナズマジャンプのDFですよ？」

音無「ええ。」

イナズマジャンプが、しかも23の人が中学生相手にするなんて・・・  
・（汗）

試合開始。

あ、京介は・・・

剣城「そんな面倒なものに参加するかよ！」

でいなくなりました！

神崎「攻めるぜ！スマッシュファイヤー！！」

得点した。

次はDFは動く。

だが・・・

ドン！

狩屋さんと蘭丸くんがぶつかつた。

霧野「うわああ！」

この時、霧野が足を踏まれたことは誰も知らない。



次の日

霧野「狩屋！」

狩屋「なんですか？霧野先輩？」

霧野「昨日の秋空チャレンジャーズのこと・・・俺、もう少しで足を痛めるところだった！」

狩屋「それで・・・？」

霧野「お前は・・・フィフスセクターから送り込まれたシードだろ！？」

すると・・・

神崎「霧野先輩！狩屋ー！」

董「どうしたの？」

狩屋「いや、霧野先輩に色々アドバイスもらったんだ。」

松風「そっか！」

霧野「董、剣城。お前達、狩屋をどこで見かけてないか？」

董「え、ええ？なんでそんなこと・・・？」

剣城「狩屋がシードだと疑ってるんですか？」

そんな・・・。

董「狩屋くんはそんなことしない！」

霧野「でも実力も高いし・・・！」

剣城「だからといって、シードだとは限りませんよ。」

董「そうよ。狩屋くんはシードじゃない。」

霧野「つく・・・！」

一方

松風・西園・神崎「えええ！？狩屋がシード！？」

狩屋「って霧野先輩に言われたんだ……。……。それで……。・シードって何？」

松風・西園・神崎「だあああ！！」

西園「シードって言うのはフィフスセクターから送り込まれたエリートで、剣城もシードだったけど今じゃ、仲間だもんね！」

神崎「……。狩屋、心配すんな！いざっていうときは助けてやるから！」

狩屋「ありがとう。」

練習

霧野と狩屋が交わったとき、

狩屋「っ！ー！うあー！」

いかにもぶつかって倒れたようにする。

霧野「！？」

神童「狩屋！大丈夫か！？」

狩屋「は、はい・・・。」

力のない声。

車田「霧野！試合が近いんだぞ！」

霧野「でも！俺じゃない・・・！！！」

狩屋「もう大丈夫です・・・。」

神崎「狩屋・・・。」

ホーリーロード全国大会。

全員、フィフスセクターにしたがってきた学校。

相手は月山国光。

列車乗り場にて

神童「み、南沢さん！」

南沢「フン・・・。」

天城「南沢！！なんで月山国光にいるんだド！」

南沢「雷門にいと、内申書に悪いからねえ・・・。」

お互い、向かい合って列車に乗った。

試合開始。

攻める剣城と倉間と神崎。

その時、月山国光のキャプテンの掛け声でフィールドがガラ空きになる。

何も知らず攻めるFM達。

その時！

倉間「うわあああ！！」

神崎「倉間先輩！」

竜巻が発生し、倉間を巻き込んだ。

これがホーリーロード全国大会のフィールドである。

松風がフィールドの攻略を掴むも

得点されてしまった。

狩屋「霧野先輩！俺、シード……ですから。」

霧野「なあっ!？」

狩屋「なーんて嘘ですよ。」

霧野「くっ。」

狩屋「天城先輩。」

天城「？」

狩屋「霧野先輩はさっきのは天城先輩のせいだって……。」

天城「なんだド!？」

狩屋「よく陰口叩いてました。」

この言葉のせいでDFの連携は乱れていく。

鬼道「どうした、DF・・・。」

董「狩屋くんが来てなんかおかしい。」

点は獲得できたが、押された展開だった。

前半終了

鬼道「霧野！前半のプレー・・・チームの連携を乱している。」

チームに起きたことを理解する鬼道さんはさすがだなって思う。

霧野「チームの連携を乱しているのは狩屋です！」

鬼道「・・・。」

円堂「頭を冷やせ。」

霧野「！！！！」



神崎「狩屋……。大丈夫か？」

狩屋「う……。。」

神崎「……。霧野先輩……。。」

霧野に声をかけようとするが……

鬼道「余計なことはするな、神崎。」

神崎「は、はい……。！」

後半

月山国光の必殺技タクティクス、タクティクスサイクルに苦戦する。

しかし霧野の機転で巻き返す。

霧野と狩屋が協力して。

鬼道「俺も以前、気が合わない奴がいた。」

董「鬼道さん？」

鬼道「だが、奴とかかわって・・・わかってきた・・・お互いのことが・・・協力して、連携技を2つも身につけた。」

董「鬼道さんにそんなことが・・・。」

天馬が得点し、弱体化しているのがわかる。

董「これは・・・。」

鬼道「月山国光は強いチームだ・・・。だが、フィフスセクターにしたがつていて本当の意味で窮地に立たされたことがなかった・・・。」

董「・・・。」

鬼道「本当の実力が発揮されるのは窮地に立った時だ！」

・・・鬼道さん・・・めちゃくちゃかつこいいです！

南沢「くう・・・！このままでは・・・雷門を離れた意味が！！！」

たった一人で反撃しようとするが・・・

一人では何もできない。

しかし・・・

それを見た月山国光がフィフスセクター関係なしな、試合を試みる。

しかし、パスがまわったのは・・・

董「決めちゃえー！京介！」

剣城「はぁぁぁ！剣聖ランスロット！！」

剣城「ロストエンジェル！！」

剣城が最後にゴールし、勝利した。

霧野と狩屋は和解した。

雷門は南沢とも和解し、気持ちよい最後で終わった。

雷門、旧部室前

円堂「瞳子さん。」

吉良「狩屋くんのこと、任せてごめんなさい。・・・あの子、11歳の時にお日さま園に来たの。」

狩屋の過去について話す、イナズマキアラバンとネオジャパンの監督、吉良瞳子。

円堂「豪炎寺・・・お前だったのか・・・。」

次の日、サッカー棟にて

神崎「新しい部員だつてさ！ははは！！」

音無「名前はなんていうの？」

輝「輝です。」

音無「名字は？」

輝「え、あ……えーとその……あのー……。」「  
なんで隠すんだ？

輝「影山です！影山輝です！」

普通じゃね？

あら？

鬼道コーチと円堂監督と音無先生が凍り付いてないか？

鬼道・円堂・音無「……………」

なんで…………

影山って…………誰だ？

アイツが帰ってくる

円堂「か、影山って……。」

凍り付いていた円堂監督がようやくしゃべりだす。

輝「は、はい……。影山零治は僕の叔父なんです……。」

影山零治……

彼は雷門と帝国のことであれば、必ずかかわるだろう。

当初の帝国の監督、そして真・帝国での監督。

不動明王とのかかわりも彼の中でもある。

影山の下だからこそもちろん、不動明王との初対面は気持ちがいいものではない。



剣城「で、サッカーの実力は？」

輝「えっ・・・あ！！実はその・・・ボール蹴り始めて二ヶ月なんです・・・。」

速水「たった二ヶ月ですか！？」

狩屋「なーんだ、素人か。」

霧野「最初は誰だって素人だろ。」

練習ではほんとに素人な腕前だったが、

物覚えはよく、フォワードに適している。

董「雷門イレブンはフォワードは2人しかいないから控えにはぴったりね。」

次の対戦相手はイナズマジャパン、吹雪士郎がコーチを務める白恋中だと発覚した。

鬼道「白恋か……。」「

皆が練習に励んでいると・・・

円堂「！？吹雪じゃないか。」「

吹雪「久しぶりだね、円堂くん。」「

現れたのは白恋の吹雪だった。

神崎「あああっあの人が・・・

董「吹雪様　！！」「

全員を払いのけながら吹雪につめよった。

董「私、吹雪様の大ファンなんです ポジションはフォワードとデ  
イフェンダーです 吹雪様にあこがれて・・・。」

円堂「・・・董・・・？」

剣城「・・・ハア・・・。始まったか・・・。」

吹雪によると、白恋はフィフスセクター手の落ち、雷門に助けを求  
めていた。

吹雪から学んだ必殺タクティクスで戦うことになった。

当日、キャラバンの中

西園「そういえば、必殺タクティクスの名前……決めてなかったね。」

松風「狩屋、なんかある？」

狩屋「うーん……。ランランランニングとか……。」

- 
- 
- 
- 
- 
- 

松風「ぶつ・・・。」

神崎「ぶははははははっ!!!」

西園「あはははははっ！！」

松風「あはははははっ！！」

董「ははははは。つ。」

女子全員「はははははっ！！」

そして・・・

全員「うわっははははははっ！！！！」

車内が大爆笑していた。

狩屋「な、なんなんだよっ！！！！」

顔を赤くしている。

董「狩屋くんって本当におもしろいね。」

吹雪「（相変わらず、雷門には変わり者が多いね。）」

鬼道「（変わり者というかバカなだけだ。）」

円堂「（2人とも・・・ひどすぎないか。）」

音無「（あはは・・・。）」

霧野「・・・はは、ざまあ・・・。」

円堂「霧野！？」

吹雪「……、雪村……。」

鬼道「どうした？吹雪。」

吹雪「いや、なんでもない……。」

吹雪「（どうしてお前が……。フィフスセクターなんかに……。）」

白恋との試合は厳しくなると想定できた。

理由は……

地面が氷り、滑りやすかった。

神崎「つとと。滑る……。」



# V S 白恋中！雪村と吹雪

地面が滑りやすく、かなり苦戦を強いられたが、狩屋の機転でなんとか攻略をつかんだ。

神崎「よっし！反撃いくぜええええええ！！！」

ゴールに向かって一直線……

「必殺タクティクス！！絶対障壁！！！」

氷の壁が邪魔をする。

神崎「わあっ！！」

弾き返された。

劍城「……やはりそう来たか……。」

神崎「こっちも必殺タクスだ！！」



しかし雪村にボールを奪われた。

吹雪「雪村っ!!」

雪村「アンタは・・・俺を裏切った!!アンタを・・・ずっと・・・待っていたのに・・・!!!!」

董「吹雪様っ!」

吹雪「雪村・・・。違っんだ・・・。」

董「吹雪様・・・?」

吹雪「雪村・・・。」

董「雪村?」

雪村「パンサーブリザード!!！」

三国「フェンス・オブ・」

しかし、必殺技が間に合わなく失点。

葵「ああ!!」

董「監督っ!!」

円堂「……。」

鬼道「必殺タクティクスをやるしかない。」

勝てるよね……必殺タクティクスの力なら……。

完成したんだし。

神童「行くぞ！」

松風・剣城「はい！」

何度もパスしながら進む。

神童「必殺タクティクス！」

松風・剣城「ダブルウィング……！」

「……右だ。」

ドオオオン……！！

しかし見抜かれ、止められた。

松風・神崎「うわあ……！」

神崎「つて……。」

松風「……。」

剣城「もう一回だ！」

神崎「ああ！」

しかし、必殺タクティクスは成功しなかった。

鬼道「・・・松風ではパスのスピードが遅いんだ。」

董「じゃあ・・・。」

円堂「必殺タクティクスは完成してない。」

遂に、雪村にボールが渡る。

雪村「うおおおおっ！！豪雪のサイア！！」

吹雪「雪村が化身を！？」

再び失点。

前半終了・・・

吹雪「・・・雪村・・・誤解なんだ・・・。」

雪村「・・・。。。」

神童「・・・どうすれば・・・。」

錦「おおおーーいー!!」

神童「!!錦!」

錦「間に合ったぜよ!」

軽く事情を説明、必殺タクティクス、地面の攻略をし、後半がスタートする。

神童「必殺タクティクス！」

剣城・錦「ダブルウイングー！」

「・・・左だ。」

しかし、また防がれた。

剣城「・・・何故だ・・・。」

錦「いやあー！やっぱりFMはかつてが違っぜよ！」

神童「え？」

錦「いやあ向こうでMFの方が才能あるっていわれたぜよ。」

全員「・・・」（汗）

水鳥「錦イ・・・。」

董「水鳥の彼氏っておもしろいのね。」

水鳥「彼氏じゃねーえよ!!」

輝「あの!」

鬼道「どうした? 影山。」

輝「僕にやらせてほしいんです!」

鬼道「・・・わかった。」

次は影山輝で挑戦。

神童「必殺タクティクス!」

剣城・輝「ダブルウィング!!」

「!!」

成功・・・

神崎「よっしゃ!! うおおお!!」

化身を出す。

神崎「聖霊フェアリー！！！！・・・フェアリーアロー！！！」

得点した。

再び勢いづき・・・

剣城「はあああああ！！剣聖ランスロット！！・・・ロストエンジン！！！」

再び得点。

「このままでは・・・。。。」

突然、交代し

大男が入った。

雪村がボールを奪い、シュートしようとするが・・・

「俺にやらせろ。」



雪村「何!？」

「監督の指示だ。」

雪村「……。」

仕方なくボールを渡した。

「おおおっ!!」

三国「やらせるか!」

三国がボールを奪うが……

「ニヤっ……。」

三国「うわあっ!!」

三国に負傷させた。

円堂「……。」

三国「大丈夫です、まだやれます。GKは俺しかいないんです。」

田堂「ああ、お前しかない。これからも！！だから今回は休め。」

三国「……。」

田堂「天馬！GK経験があるのはお前だけだ。」

松風「はいっ！！」

初心者の天馬のサポートをしつつ攻める。

狩屋「ハンターズネット！」

防ぎきれなかった。

狩屋「アッ！」

霧野「ザ・ミスト……。」

しかしぶつとばされる。

松風「つ……。」

神崎「やらせるかつ」

蹴り返した。

神崎「天馬！」

松風「ありがとう、聖也。」

神崎「へへ。」

雪村「くっ……。」「

この時白恋の人間の瞳の色は変わった。

もうフィフスセクターの指示には従わない。

と。

雪村「吹雪先輩……。アナタが正しかった……。」「

DFを切り抜け化身を出す。

雪村「豪雪のサイア！」

松風「魔神ペガサス！」

蹴ったボールを蹴り返そうとする。

松風「うおおおおおっ！！！」

吹雪「がんばれ！雪村！！」

董「ええっ！？は！？吹雪様！？」

しかし、松風が蹴り返し・・・

必殺タクティクスも成功、

神童「奏者マエストロ！」

神童「ハーモニクス！！」

得点に成功。

白恋に勝利した。

雪村「・・・吹雪先輩・・・。」

吹雪「またサッカーやろう。」

雪村「はい。」



## 雷雷軒にいる悪魔

それは当然の話だった。

円堂「俺は監督をやめ、鬼道に引き継いでもらう。」

松風「何故やめるんですか！？監督！？」

神崎「円堂監督っ！」

なんで・・・俺は円堂監督にあこがれ続けてたのにな・・・。

神童「どうしてか教えてください、監督！」

しかし、円堂が出て行ってしまった。

神童「どうして・・・円堂監督・・・。」

剣城「いないものは仕方がない。」

董「ちよっ・・・京介！」

天城「剣城イ！！」

剣城「……。」

董「まるで死んだみたいなこと言わないでよ!!」

……。

神童「えーと……董……。」（汗）

松風・神崎「円堂監督……円堂監督……円堂監督……。」

剣城「……死んでない。」

あれ……あら……？

神童「……鬼道……監督か。」

鬼道「今日から練習メニューを変える。」

と言って鬼道が付きだした練習メニューは……

董「……準備体操にしては長い……。」

水鳥「これって……。」

茜「ボール、使ってない。」

なんとも言えない不陰気に包まれた。

これって・・・正しいの・・・？

これが・・・鬼道監督のやり方なの・・・？

神崎「へへ・・・ハア・・・ハア・・・鬼道監督の練習メニュー・・・応えるな・・・。」

音無「兄さんっ・・・！」

鬼道「・・・。」

夜になり、皆ヘトヘトになっていた。

董「・・・京介まで・・・。」

キャプテンである神童、シードだった剣城、留学していた錦でさえ、ヘトヘトになっていた。

西園「・・・僕、明日来るのやめます。」



天城「俺もだド！なあ、影山！」

輝「えっ・・・ええ！？」

その夜、雷雷軒

天城「納得がいかないド！なあ、影山！！」

輝「へっ・・・は・・・？」

天城「鬼道監督の練習だド！」

輝「え・・・は・・・はい。」

輝「（なんでこんな目に・・・。）」

西園「・・・。」

董「シードでもこんな練習じゃなかったよ。」

店に来ているのが西園・天城・影山・董の四人である。

聖子「ご注文は何にしますか？」

董「えっ・・・あ・・・？聖子さん！もう大丈夫なんですか!？」

聖子「ええ、もうすっかり。本当は認可されてない治療を誰かが取り払ってくれたの。」

董「そうだったんですか。・・・なんでここでバイトを？」

聖子「実は・・・飛・・・あ、いろいろ事情がありまして・・・。

」

何かを隠す聖子。

何を隠したんだろ・・・。

閉店時間後

飛鷹「手伝ってもらって、助かったよ。」

聖子「いいえ、響木さんにご縁があるのは同じなんですし・・・。」

飛鷹「そういえば、弟もサッカー部だと響木さんから聞きましたが。

」

聖子「はい、イナズマジャパンの大ファンで・・・。イナズマジャ

パンの人に会つと興奮して手が付けられないんです……。だから飛鷹さんにご迷惑をおかけしちゃんじゃないかと……。」

飛鷹「そんなことないですよ。……イナズマジャパンの優勝によつて、こんなことが起きたんですから。」

聖子「そなた……。飛鷹さん達は悪くないです。」

飛鷹「ありがとうございます。」

聖子「……。フウ……。それにしても……。弟、実は言うところからできるんですけど上達が遅くて……。だから教えてほしい……。んです。さっき言ったことと矛盾しますが……。」

飛鷹「いや、俺より弟の方ができますよ。」

聖子「え？」

飛鷹「俺はDFだったんで、やれることは限られていますし、俺……実は素人でイナズマジャパンに参加したんですよ。」

聖子「えええっ！！？？」

事情が呑み込めていない。

当然、代表決定戦は実力の高いものが選ばれる……。

飛鷹「俺は実は……。不良だったんです。」

聖子「……。不良？」

飛鷹「でも、そんな道から救ってくれたのが・・・響木さんだったんです。だからイナズマジャパンとして活躍して・・・響木さんのお役に立ちたいと思ったんです。だから・・・全くの素人でした。確かに強くはなりませんでしたけど・・・それは円堂さん達のおかげなんです。この俺自身が強くはないです。」

聖子「飛鷹さん・・・。」

飛鷹「長くなりましたね、バイト代・・・」

聖子「いいですよ。私はボランティアとして飛鷹さんを手伝いたいです。ただなんです。」

飛鷹「・・・でも神崎さん・・・。」

聖子「じゃあ・・・。」

二日目も続くメニュー

影山・天城・西園は来てない。

董「遂に来なかった……。」

松風「……。信助……。」

その夜、雷雷軒

董「二日連続、聖子さーん！」

聖子「董ちゃん……。」

董「……。あ、天城先輩達……。」

天城「このまま転校すればいいド！」

輝「ええ！？」

飛鷹「……。戦ったらどうだ？」

天城「ハ、戦うド！」

輝「ええ！？戦うつて・・・鬼道監督と！？」

天城「西園、明日来るド？」

西園「・・・僕は・・・行きません・・・。」

董「・・・。」

聖子「あの子・・・信助くんだったけ・・・。」

董「は、はい。」

聖子「フフ、一年生っぽくていいな。」

董「・・・。」

次の日・・・

何が起きたかわからないが

全員そろった。

皆で練習メニューをやりぬき、鬼道監督を見返すと。

そして・・・

天城「やりきったド!!」

鬼道「・・・。」

音無「兄さん・・・。」

・・・。

しばらくの沈黙。

剣城の目についたのは紙切れ・・・。

剣城「・・・これは・・・。」

選手一人一人のデータ。

神童「剣城？」

剣城「・・・そういつことか。」

イシド「・・・・・・・・神崎聖子。」

聖子「ハ、イシド様。」

イシド「キミには期待している・・・。剣城姉弟が裏切った今・・・  
・キミの力が必要だ。」

聖子「はい。」

イシド「・・・雷門を潰せ。」

聖子「はい。」



そこへ・・・

聖子「誰だ？」

イシド「・・・久しぶりだね。」

アフロディ「・・・。」

## 雷雷軒にいる悪魔（後書き）

初心者設定の天馬、信助、輝は異常に強いですよね。

飛鷹も、シユートを止める率がDFで一番高いんですよ。ほら、映画でも主人公ばりの活躍をしたくらい・・・。

初心者設定は天才なのが多いですよ。

## アフロディと木戸川静修

鬼道「次の対戦相手は木戸川静修だ。」

輝「木戸川静修？」

神童「木戸川静修は俺達を破ったところだ。」

狩屋「でも試合の取り決めがあつたんだろ。」

三国「いや、あれは・・・試合の取り決めがない・・・。実力で負けたんだ。」

でも確かそのチームって・・・

董「豪炎寺さんが元いた学校でもありますよね？」

鬼道「ああ。」

そんなわけで練習が始まった。

いつものように向かい合う列車に乗ると・・・

監督席には・・・

金髪の髪を結び少し染め、中性的な顔立ち・・・

鬼道「アフロデイ!？」

松風「え・・・?アフロデイって・・・?」

神崎「聞いたことある!!韓国代表だったとか・・・。昔、世宇子中のキャプテンだったとか・・・。」

春奈「その通りよ。」

相変わらず、きまづい不陰気の列車の中。

アフロデイ「・・・鬼道・・・。(ニツ」

董「なんか・・・綺麗な人・・・。」

神童「・・・。」

わ、妬いてる!かわいいかも。

董「妬いてる拓人ってかわいいね。」

神童「なっ・・・あうう・・・。」

剣城「いちゃいちゃするな。見苦しい。」

董「うるさいっ！！！！アンタもいい女見つけない！！・・・あ、ブラコンは無理か。」

剣城「張り倒すぞ。」

董「列車の中でどーやって?」

剣城「チツ・・・。」

あー・・・つたく・・・弟はなかなか手名づけられない・・・。

到着したフィールド。

鬼道「フォーメーションを発表する。フォワード！剣城、神崎。ミッドフィルダー！神童、松風、錦、浜野。ディフェンダー、狩屋、霧野、西園、車田。キーパー三国。以上だ。」

天城「!？」

神崎「へっへ！スタメンスタメン！」

松風「やったね。」

神崎「ああ。」

天城「どうして・・・どうしてだド・・・。」

皆が位置につき、鬼道がアフロディをにらんでいる。

董「・・・あの人本当にきれい・・・。女みたい・・・。」

鬼道「あんまり言つな、本人気にするから。」

董「はい・・・。でもなんでアフロディって呼ばれているんですか？」

鬼道「厨二病だから。」キラッ

董「ち・・・ちゅーにーびょー・・・。」

音無「（ま・・・まあ・・・神発言＝厨二病・・・。）」

厨二病の人が監督を・・・？

鬼道「まあ、あのアフロデイだ。油断ならない。」

え・・・結局アフロデイっていう人・・・なんなんだ・・・？

試合が始まる。

いきなりドンドンおされ・・・

「いまだ！」

シュートが決まる・・・！？

ドーン！！！！

水が噴き出す。

鬼道・アフロデイ「何っ！？」

董「あ・・・あれは・・・。」

ピッチダウン・・・。

激しい戦いが予想される・・・。

雷門からの開始。

董「ピッチダウン・・・。」

鬼道「木戸川も知らされてなかったのか・・・。」



## 回想

聖子「……お前は確か、世宇子の……。」

イシド「次の試合のフィールドだが……」

アフロディ「言う必要はない、雷門と同じ条件で戦う。」

聖子「どういうことだ！？聖帝……いや、イシド様に……。」

アフロディ「僕は革命にも乗らない……フィフスセクターにも乗らない。」

聖子「どういふことだと言っている……！」

イシド「いいだろう……アフロディ。」

アフロディ「……残念だよ。」

聖子「何がだ……！」

アフロディ「……君が君じゃないからね……。。」

終了

## 動き出す悪魔

お互い、必殺タクティクスでピッチダウンをなんとかしのいでいく。

董「すごい・・・今回はかなり神経使う戦い・・・。」

葵「いつピッチダウンするかわからない・・・。」

錦「いくぜよおおおおー!!」

しかし、踏ん切りが足りずシュートが打てなかった。

神崎「錦先輩っ!」

錦「すまんぜよ・・・。」

神崎「いえ・・・くっそう!ピッチダウンさえなければ・・・。」

錦「ハア・・・。」

董「大丈夫？」

なんか今のですっかり自信をなくしちゃったみたいだな・・・。

マネージャーとして選手のメンタルを・・・！！

そこへ・・・

染岡「錦！」

錦「っ！！師匠！！！」

誰だ・・・この人？

サングラスの帽子を外した。

鬼道「染岡！！！」

音無「染岡さん！」

神崎「うわあああああああつ！！！！染岡様あああああつ！！」

ああ、始まつちゃった・・・。

神崎「お、おれ・・・！！！！イナズマジャパンに憧れていて・・・。  
染岡さんを尊敬してます。」

染岡「おお、おもしろい奴だな。」

神崎「ドラゴンスレイヤー・・・。めちゃくちゃかつこいいです  
！！！！」

染岡「ドラゴンスレイヤーが一番好きな技か？」

神崎「いいえ、グランドファイアと皇帝ペンギン3号が好きです。」

おいっ！！！！

董「・・・京介以下な奴初めて見た・・・。」

剣城「ハア？俺以下だと・・・？」

染岡「素直はいいことだ。」

錦「あの・・・師匠。」

染岡「錦・・・。お前に足りないものは飯だ！！」

錦「はい！！！！」

元気になってよかった・・・。

マネージャーって選手より大変かもな・・・。違う意味で。

結局、木戸川静修と雷門の試合は雷門に軍配が上がった。

神崎「いやあー。俺、結局得点できなかった。」

神童「仕方ないだろ。」

神崎「わかってますけどー・・・。」

松風「ねえ！一年で雷雷軒に行かない？」

剣城「・・・遠慮する。」

松風「狩屋ー!!」

狩屋「俺エ?・・・うー・・・ん。」

西園「行こうよ。」

狩屋「・・・わかった。」

輝「じゃ、僕も。」

葵「私も行く!!」

董「ねえねえ、私も連れてって。」

松風「いいですよ、・・・あれ・・・聖也は?」

神崎「わ、わりい!!!俺、急用で!!!」

染岡「アフロディ・・・か。」

鬼道「染岡?」

染岡「いやあ、十年前、帝国を大差で破った。その帝国のお前は、今度はアフロディを破った・・・。」

鬼道「宿命とでもいいたいのか？」

染岡「・・・お前は小さいことでも大きく考えすぎだな、昔から。」

鬼道「そうかもしれんな・・・。俺は帝国のことで悩み、影山零治に苦しんだ。小さなことで悩みすぎていた・・・。そんな俺を変えたのは・・・雷門だ。」

染岡「・・・。ハハッ、そうか。」

鬼道「雷門の絆・・・。あいつらには色々教えてもらった。あいつらがいなかったら今の俺はなかった。・・・一生、影山零治に苦しめられていた。」

染岡「でも、俺達には鬼道が必要だった。・・・いつしか、お前に頼っていた。・・・お前達がイタリアメンバーと戦っていた時・・・急遽、影山に予定を変更され、お前達がいないままにアルゼンチンとの試合が始まって・・・結局勝てなかった。」

鬼道「染岡・・・。」

染岡「・・・いつまでも思い出話に花を咲かせてる暇ないな・・・。」



その頃、雷雷軒。

わいわいわい。

西園「それでね、いつか僕も天馬や錦先輩達みたいなすっごい化身を出したいんだ。」

松風「そつかあ……。」

董「……聖子さん、お水！……聖子さん？」

聖子「……雷門は少しずつだが、強くなっている……早く潰さないと。ブツブツ。」

飛鷹「……。」

恐らく、特定の人を除き、聞こえていない。

董「聖子さんっ聖子さん！！」

聖子「あ、はっ……。ごめんなさい……。」

聖子「……決めたわ……。雷門を明日潰す。」

## お知らせ 感想

同時進行で劇場版を書いているので更新ペースおそくなります。

短編小説として書くのでかなり長く書くので劇場版の小説を出すのはかなり時間がかかります。

全部、覚えているわけじゃないので・・・はい。

完全ネタバレなんで避けた方がいいです。見てない人は。

試合展開とか、皆を楽しませるため変えたいと思いますし・・・。  
違う展開もあるので 後半あたり ネットバレとして見たい人も劇場版を見てから・・・にしてほしいです。

そして文字の関係で感想いきます。ネタバレ注意です。

速水「俺達いけなかったですう。」

「おそらく、鬼道が・・・鬼道がいけないんだな、あのシスコンが。」

鬼道「誰がシスコンだ。」

「中の人的に大変といっても円堂より喋ってないのに。」

浜野「ちゅーか、俺は・・・。」

倉間「俺もさあ・・・。」

「かわいそうだ・・・。んじゃ、もっと感想・・・。」

倉間「無視か。」

鬼道「俺もスルーされてるぞ。」

「ハーレムゲームメイカーはさがってる。」

鬼道「なりたくなっただけじゃない。」

不動「ハハハハッ、めちゃくちゃバカにされてるなあWWW！」

「ずうーっと同じ座り方ベンチさん、こんにちは。」

不動「俺はベンチじゃねえ！！！」

鬼道「バカにされてるのはどっちだ。」

「皆立ってうずうずしてるのに。風丸とか円堂とか。」

不動「何がいたんだよっ！！！」

「長いベンチ生活して、ちょっとやそつとじゃ、ベンチから離れないだね。」

不動「ベンチベンチ言っなあああああっ！！！！！」

「ベンチの不動。」

不動「黙れええええええ！！！」

「いや、文字通り不動のベンチか。」

不動「くっそおおおおうぜえええええっ！！！！鬼道——っ——キラーファイルズだ！！！」

・・・シーン。

不動「はあ！？誰もいないのかよ。」

あるのはベンチだけ。

不動「っけんな・・・。」

とかいいつつ座る。

不動「みとめねえ・・・俺はベンチじゃねえ・・・。」

速水「座ってますね、先輩が。」

倉間「ツンデレか。」

浜野「倉間が言うべきことじゃないと思う。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2850v/>

---

イナズマイレブンGO もう1人のシード

2011年12月25日14時53分発行